

---

Eröffnung das Schicksal der schönen Blumen ~

ppt

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS Unendlich・Stratos } Er?ffnung  
das Schicksal der sch?nen  
Lumen }

### 【Nコード】

N9787T

### 【作者名】

p p t

### 【あらすじ】

「あなた…… 創造神にならない？」

ボクは、真っ白な空間でいきなりそう言われた

高校の夏休みに海へと出かけた神崎京は、沖で流される少女を見つけた。その少女が気になり、自身も沖へと向かう京。だが、暴風

雨によって京自身も流されてしまう。運よく顔が海面から出たところで京は後ろに何かの気配を感じた。振り向くとそこには先ほど沖で流されていた少女が宙に浮いていた……

二作目です。ガチチートです。一夏“くん”ではなく、一夏“ちゃん”が出てきます。

現在のタイトルはラウラちゃん仕様です。来週はシャルロットちゃん仕様のタイトルに変わります。

一夏ちゃん仕様は『IS インフィニット・ストラトス』運命を開く可憐な花』です。

## プロローグ（前書き）

まず、この小説を投稿しようと思った動機から。

もともとこの小説は、一作目を書いている合間にちょこちょここと書いていた妄想の塊でした。

あるときからは少し真面目に書き始めたのですが、一作目の続きを書いていくときにこの小説と裏で繋がってしまったのです。

一作目の方を書き直すという手もないことはないのですが、時間がかかる上に面倒なのでこちらも投稿することにしました。

一応見直しましたが、始めの方は本当に妄想の塊だったので、もしかしたら矛盾していたり、書き方が不自然な箇所があるかもしれませんが。見つけられた場合は感想にて報告していただけると幸いです。

あらすじに書いたタイトルの変更について。

あらすじに書いた通り、現在は一夏ちゃん仕様（日本語）のタイトルです。これはタイトルを変更しても意味が変わるのではなく、タイトルに各キャラクターの出身地の言葉を使ってみようというただの思いつきです。翻訳サイトを利用しているので本当に意味が変わっていないかはわかりませんが。

まえがきに長文失礼致しました。

## プロローグ

「あなた…… 創造神にならない？」

きらきらと輝いた瞳で少女がボクに言う。 どうしてこんなことになっただろう……

それは、暑い真夏日の朝だった。 天気予報では。 その日、ボクは高校の夏休みに海へと遊びに出かけた。

だが、ボクが海に入った途端、それまでは日が照って暑いくらいの天気が急に荒れ始め、終いには台風とまではいかないが、雨と強風が吹き荒れる天気になってしまった。

もちろんボクも海から上がろうとしたが、沖の方に小さな女の子が見える。 その女の子を見ると、なぜか居ても立っても居られなくなり、ボクは海へ飛び込む。

だが、雨と強風の吹き荒れる海はそんなに甘くはなかった。 ボクが海へと飛び込んだ瞬間、物凄い潮の流れに飲み込まれてしまう。

幸いにもすぐに顔が海面から出る姿勢になったのだが、かなり沖の方へ流されてしまった。 しかも例の女の子の姿が見えなくなっている。

ボクは急いで探したが、どこにも見当たらない。 やはり流されてしまったのだろうか。 一瞬そんな不安に駆られるが、真後ろに何か

の気配がした。

振り向くと、さっき見た女の子が宙に浮いている。もちろん普通はありえない。だが、目の前で起きている。なぜかそれがスウィーツと頭に入ってきて、納得する。

『これはそういうものなんだ』と……

そのとき、急に潮の流れが変わる。そして、急に変わった潮の流れに付いて行けず、ボクは暴風雨の吹き荒れる大海原に飲み込まれる。

(あ…… さっきの女の子が……)

こっちへ近付いてくる。と考える前にボクの意識は途切れた。

こっちは……どこだろう？

真っ白な、ただ真っ白な何もない空間。

どこまでも続く白は、本当に色も無いかのように真っ白だ。

そこに一人、小さな女の子が居る。

ボクは、その女の子に声をかけようと思った。知らないところで、ここはどこなのかを聞こうとも思ったが、それよりも「話し掛けな」といけない」という風に思ったから。

けど、ボクが話し掛ける前に女の子の方から話し掛けてくる。

「あなた…… 創造神にならない？」

Side 小さな女の子

私は、何に対しても興味や関心といったものが持てなかった。そう、何に対しても。

もともと私は、創造神として生まれ、先代から引き継いでからは全てを創造してきた。

だが、私には興味を持てるものが無い。つまらなくて、そのつまらない生活がもう数えるのも億劫になるくらいの年月続いている。

人間や、他の生物には寿命があるからこんなつまらない生活が永遠に続くことは無いが、私は創造神。永遠の時を生きる創造神だ。

その私にとって、それは苦痛でしかない。そんな生活はもういやなんだ。

そう思っていた頃に、私と“彼”は出会う。

初めは、人間の常識ではありえない出会い方だった。

私がつまたま海に流されている彼を見つけて、私は時間が止まった

ように感じた。

彼の顔を見ると、胸が高鳴り、顔が真っ赤に紅潮していくのがわかる。それは私にとってはとても衝撃的なことで、それまでは、人間はなぜ“恋”などという幻想に現を抜かしているのかが不思議で仕方が無かったのに、今ではもうそれもわかってしまう。

心地いいのだ。胸の高鳴り、顔の紅潮、体中の震え、私にはその全てが心地よく感じる。

(ああ、私は……この人間に“恋”をしたのだな……)

Side out 小さな女の子

Side 京

「で、創造神って言っても、具体的には何をすればいいの？」

「そうですね、まずは創造神様の、その溢れ出る神力を制御するところから始めましょうか。制御していないといういろいろ危ないこともありますしね」

結局、ボクはあの娘の期待に満ちた目に負けて創造神になりました。いや、正確にはボクは死んだ瞬間に創造神になったらいいんだけど。創造神になった途端に女の子の口調が変わった。一応“前”創造神とはいえ、“現”創造神にはそれなりの言葉遣いをしなくてはいけないみたい。それほどまでに“現”創造神の格は高いらしい。

「神力の制御ってところには賛成なんだけどさ、普通にしゃべって



くれない？ 敬語とかなしで。あと、ボクは君の名前をまだ聞いていないから呼びにくい」

「失礼いたしました。わたくし、アリスと申します。今後、創造神様の従者のようなものを務めさせていただきますのでよろしくお願ひ致します。なるべく普通におしゃべりすることができるよう努力はしますね」

「ボクの名前は神崎 京。 “ 気軽に ” 京って呼んでくれて構わないよ」

「わかりました。 “ 京様 ”。では、神力の制御に入りますが」

そこから数万年に及ぶ修行が始まった

### 数万年後

京はもう神力の制御どころか、神力を如何に効率よく使って戦闘に勝利するかの研究ができるくらいに強くなっていた。

最初こそアリスに負け続けていたが、今では普通に勝利するくらいにまでになっている。

アリスの方も、初めは敬語しか使わず、冗談も真に受けるくらいだったが、今では普通にしゃべったり冗談を言い合ったりできるようになっていた。ボクにとっては嬉しい限りだ。

そしてボクとアリスは共に愛し合い、共に生きることを誓った仲

でもある。もちろん、もう何度も【見せられないよ！】や、【閲覧規制】をしてる感じ。

そのときのアリスはものすごく可愛い。どの世界のどんなものよりも可愛いと思う。

話がそれたが、とにかくボクは神力を制御することが十二分にできるようになった。

「京」

「ん？ どしたの？ アリス」

アリスに呼ばれた。

「京、あなたはISの世界に行ってくれない？ 各世界の管理なら私たちに任せてくれれば大丈夫だし」

「え？ どうして？ ボクはアリスと」

「ありがと、京。でもね、最近、神の中で反乱軍が組織されたりいのよ。どの神が反乱軍なのかはわかってないんだけどね。それでね、その神たちは欲望に塗れた人間を転生させ、各世界で好きなように暴れさせる、いわばテロのようなものを仕掛けているの。そこで、あなたにはその転生者を潰しにかかって欲しいのよ。彼らも圧倒的な力の差を見せ付ければ迂闊には手を出せなくなっていくしね。そしてこれをやるのは、最強の神、創造神である京か、前創造神の私のどちらかが相応しいと思うわ。でも、京なら私を安全なところに置いておこうとするでしょ？ 私が何と言おうと。だから」

そうか…… 全てお見通しなんだな…… アリスには。

「ボクはアリスのためならどこへでも行くよ。たとえそれが神殺しの槍の雨が降る場所であっても」

「あ、ありがとう……」

アリスの顔が紅潮する。アリスは未だにこういうセリフには弱い。そういうところもすごく可愛い。

「さてっと、とりあえず行ってくるよ。準備は向こう行ってからでも間に合うしね」

「ふえ？ ちょっと待っ」

そして、ボクはISの世界へと降り立った。

Side out 〈京〉

Side 〈アリス〉

「さてっと、とりあえず行ってくるよ。準備は向こう行ってからでも間に合うしね」

私が少し惚けていると、京が早速降り立とうとする。私は突然表現の出来ない孤独感に囚われた。

「ふえ？ ちょっと待って！！ 京！！」

でも、京は私が言い終わる前に降り立ってしまった。

はぁ、最後にキスくらいしたかったのにな……

Side out ｝アリス｝

## プロローグ（後書き）

中間テストが終わったので安心して投稿しました。

しばらくはこちらの更新を優先します。

理由は、前書きの方にも少し書かせて頂きましたが、私が一作目の続きを書いているときにこの小説と裏で繋がってしまったからです。

一作目の方を書き直すという手もないことはないのですが、時間がかかる上に面倒なのでこちらにも投稿することにしました。

そのため、こちらをある程度進めないと片方の作品でもう片方の作品のネタバレをしてしまう可能性があるのです。

一作目の方を楽しみにして頂いていた方。申し訳ございませんが、こちらがある程度進むまでは一作目は更新できません。御了承ください。

この度は作者の勝手な都合で一作目の更新が一時停止してしまい、申し訳ございませんでした。

……実はタイトル、思いつかなかったんですけど、京のISの名前が花の名前だったので、その花言葉を組み合わせたものなんです。

原作開始！……の前 フランスにて（前書き）

第二部です。今までに書き貯めていた分を一気に投稿します。

原作開始！……の前 フランスにて

ズドドドドドドッ！！

ここはフランスの何処かの街、その街でいきなり建物が崩れた。

その下には、女の子と、その女の子を片手で抱きかかえてもう片方の手で瓦礫を支える女の子の姿があった。

S i d e 　↳シャルロット↳

私は少し用があつて街の外れにある建物の近くを歩いていた。少し大きな建物の前を通るとき、いきなりその建物の壁が崩れた。でも、私はそれにすぐには気付かず、逃げるのが遅れてしまった。

でも、私が瓦礫の下敷きになることはなかった。腰まで伸びる透き通った金髪と、どこまでも透き通っているように見える藍色の瞳が特徴の女の子がびっくりして倒れそうになった私と、上から落ちてきた瓦礫の両方を支えてくれていた。

「大丈夫？」

女の子が話し掛けてくる。

「え、あ、うう、だ、わ、私は大丈夫でしゅっ！」

私は緊張してちゃんとしゃべれていない。うう、絶対変な子だと思われたよね？

「そんなに緊張しないで。ボクは神崎 京。キミは？」

「えっと、私、シャルロットっていいいます」

あれ、私、さつきからずっと女の子に抱えられたまま……

意識した瞬間、カアアツと顔が赤くなっていくのがわかる。うう、私、女の子同士でこんなにドキドキするの初めてだよ……

「あ、シャルロットちゃん、顔が赤いよ？ 大丈夫？」

「い、いえ、なんでも、ないです」

恥ずかしくて返事が途切れ途切れになる。やっぱり恥ずかしい……

「あ、ごめんね。シャルロットちゃん、ボク、キミを抱えたままだったね。もしかしてボクのことを意識してくれたの？」

「い、いひえッ、にや、にや、そんなにやこにやいでしゅっ！」

うう、また囁んじゃった……

そんなことを考えていると、いきなり京さんは真剣な顔になって、

「ごめんね、ボク、そろそろ行かないといけないみたい。ここにボクが居たことはキミとボク、二人だけの秘密だよ？」

そう言って、彼女、京さんは消えていった。女神様みたいだったな……



後でこの事故のことを聞くと、あの建物には欠陥があつて、もともと崩れやすかつたので事故の翌日から取り壊しが始まる予定だつたらしい。このとき聞いた話によると、崩れたとき私がいた場所には少し空洞があつたらしい。そこはいつ崩れてもおかしくない状態だつたけど、なぜか奇跡的に崩れなかつたみたい。京さんが守つてくれたのかな。この事故以来、京さんは私の前に現れていない。

Side out 〔シャルロット〕

Side 〔京〕

落ちてきた瓦礫を支えたあと、瓦礫をそのままの状態で固定した。

ボクが「大丈夫？」つて聞くと、

「え、あ、うう、だ、わ、私は大丈夫でしゅっ！」

と返つてきた。……すごく和む……

数十秒後……

「い、いひえッ、にゃ、にゃ、そんなにやこにやいでしゅっ！」

可愛い声で嘔みまくるシャルロットちゃん。やっぱりすごく和む

……

ハツ　少し離れた建物の屋上に急にナニかが現れた……　転生者か！？　……だとしたらまずい。すぐに消しに行かないと世界にどんな影響を与えられるかわからない。

「ごめんね、ボク、そろそろ行かないといけなみたい。ここにボクが居たことはキミとボク、二人だけの秘密だよ？」

そう言っただけでボクはその気配がした建物へ転移する。

すると、魂の汚れたいかにも怪しい感じの男が騒いでいた。

「フハハハハハハハ、ハーハツハツハツハツハ！　やったぞ！　やったぞ！　俺はISの世界へ転生したぞ！　これも馬鹿な神が居てくれたおかげだな。誰が力の平和利用なんかするかって！　これでシャルたんやラウラたんを俺のハーレムにするという目標が

」

その男がそこから先を口にすることはなかった。なぜなら、もうその男の首はきれいに胴体から離れて宙を舞っていたからだ。

「……汚らわしい」

ボクは、その男の全てを抹消した。そう、全てを抹消したのだ。男はそもそも存在すらしていなかったことになっている。

ボクはあんな奴等は許せない。例えどんなことを言っていたとしても、魂を見ればわかる。あいつは決して転生させてはいけな

イプの魂だ。

恐らく、いや、確実にこれは反乱軍の仕業……だと思つ。たとえどんな下級神でも魂を見分けることくらい朝飯前だし、故意に転生させることはまずないように教えた。その上で今回の転生者が来た。もう確定だよ。多分。でも、アリスやボクでも正体がわからない。恐らく、相当力の強い神がトップなんだろうなあ。それもアリスやボククラスの……

けど、今はそんなことよりもっと、ずっと気になることがある。

「はあ、眠い…… けど家がない……」

……そう、家がない。神の力でなんとかなることはなるのだけれど、極力使わない。省エネがモットーだし……

いつの間にか夕暮れ時になっていた空を見上げながら、一人の創造神は路頭に迷っていた。

「ん？ そのキミ可愛いねえ、ちょっと天才の束さんと一緒に来ないかい？」

そして路頭に迷っていた創造神はウサミミによって半強制的にナンパ（誘拐）されたのだった。

原作開始！……の前 よくわからない研究施設にて

ボクが『天才の束さん』と名乗るウサミミによって何処かの研究施設？に連れ込まれて五年が経った。

……そーいやあボクの正体を最初にばらしたのは束なんだよね。

以下回想

「早速だけどキミ、何者？ さっきの男、首を飛ばした後何もなかったかのように消えたけど、あれはどういうことなんだい？」

「!？」

どうしてそれを覚えている……？ 神ではない人間が…… そうか……

「いいだろう、私の正体から説明しよう」

「正体……？」

少し神様ぶって話してみる。

「私は神崎 京。正体は創造神。今はわけあってこの世界に降り立っているのだがね」

「へえ、詳しく聞きたいなあ」

「ああ、聞かせてやろう。前創造神……なぜか今は部下なのだが、

そいつにな、極秘裏に反乱軍が組織されたことを聞かされたのだ。奴等は全ての世界で無差別テロとも言えることを目論んでいる。それが少し厄介なのだよ。死んだ人間にチートな能力を持たせて転生させる。それだけならまだよかつたのだが、自業自得で死んだ上に汚れに汚れた魂の転生者しかない。これでは世界をめちやくちやにされてしまう。どの神が反乱軍なのかもわからない。信頼できる神も一部しかない。そこで、我が始末しに来たのだ。さて、次は「束」と言っただかね？ 君の正体だ」

「束さんは束さんだよ？」

「そうだ。君は君だ。だが、君には神の頭脳がある。だから先程の男のことを覚えているのだ」

「神の頭脳……？」

「ああ、神の頭脳だ。それ以外では私の始末した人間のことを覚えていることなんぞ、本物の神ぐらいしかないからな」

「そっかあ、じゃあ束さんはそれ信じるよっ」

「……えっ？」

いきなりテンションが変わった上に、信じるとまで言われて、思わず素が出てしまった。

「おお、それがキミの素なのかな？ 束さんとだけ素で話してくれるなんて、もう、キミは正直だねえ。そんなに束さんが好きなのかい？」

なにやらおかしいことになってる…… この手の人間は、好きなだけ言わせておいた方がいいんだよね。適当に『はいはい』言っとこう……

「はいはい」

「おお、愛の告白！ じゃあ東さんと結婚しよう！」

「はいは」

「じゃあ式はいつ挙げる？ どこで挙げる？ 東さんと愛を誓い合おう！」

「い？」

しまった…… とんでもないことを二つ返事で承してしまった

……

「まあ、冗談だけだね」

ふう…… よかったあ……

「とりあえずきよーちゃんも東さんが今から創る『IS』のテストパイロットしてくれないかな？」

「テストパイロットだけじゃなくて開発も手伝えるよ」

「おお！ じゃあ一緒にやろう！ 夫婦最初の共同作業が」

「夫婦じゃない！」

「ちっ」

明らかに舌打ちされたよ……

数日後

「で、出来た……」

「……きよーちゃんってもしかして東さんより天才？」

ボクたちは一睡もせず熱中し驚異的な速さで基本設計などを決めて試作機も作った。明日はついに試作機を動かす段階に入る。

翌日……

「きよーちゃん、準備はいいかな？」

「うん、いつでも構わないよ」

「じゃあベッドいこっつ　愛を　」

「なんでやねんっ」

「ちえっ」

東がまたとんでもないことを言い出してくる。……本気じゃないよね？

「とりあえずちゃんとかさっつ」

「きよーちゃんのいけずー」

「ほろほろ」

始める前に少しトラブル？はあったが、それ以外は順調に進んだ。ただ、ボクも手伝ったせいかな、とんでもない化け物ISになってしまっている。

例えば、ISコアを魔改造してGNドライブ（ガンダム00…知ってると思うけど）とほとんど変わらない機能を持つようになった。もちろんツインドライブも実用化している。

「やっぱりきよーちゃんって神様なんだなあ…… 普通こんな作れないよ？」

「ん？ 束なら時間かけたら出来るんじゃない？」

「もちのロンのロンだよ。天才の束さんをなめてもらっちゃあ困りますなっ！」

口調がおかしい。しかも意味がわかりづらい。まあ、いつものことだけ。

「とりあえずこの試作機はきよーちゃんが持つときなよ。でも何かあったらすぐ束さんに報告だぞっ」

「わかった。けどさ……」

「ん？ どうしたのかな？」

「そろそろ外に出たいんだけど……」

そう。実はここに来てから一度も外に出ていない。というか出れないのだ。いや、一応神としての力を使えば難なく出れるけどそれは最終手段だから使わない。



「ええ、東さんはきょーちゃんにはずっとここにいてほしいの  
い。ぶうぶう！」

「えー……」

「なーんてね きょーちゃんにはきょーちゃんの事情があるのは  
わかってるのだよっ」

おお、この人の口からそんな言葉が出るなんて……

「だからきょーちゃんには五年後からIS学園に通ってもらおうのだ  
っ！」

なぜかびしつとこちらを指して言う東。……やっぱり人の事情と  
か考えないのねこの人は。まあ、ボクはそんな事情とかあるわけじ  
やないけど。

「……どうして五年後？」

「東さんの妹が五年後に入学するのだよっ」

ああ、妹さんが心配なのね。意外と姉らしい一面もあるじゃない。

「その妹さんと一緒に入学すればいいのかな？」

「その通りっ！ さっすがきょーちゃん、わかってるねっ！」

「じゃあ今からその妹さんのところに行って友達になっとけと？」

「おおっ、そこまでわかるとはっ！ やっぱり東さんときよーちゃんは結ばれる運命に」

また始まった……最近頻繁に東がどこか遠い世界へ飛んで行くんだよね……「こういつときは放っておくに限る。」

数時間後……

「ハッ!? きよーちゃんと結婚して子供産んで……そこからどうなったんだっけ?」

今日はまたえらいところまで飛んで行ってたみたいだ……

「結婚もしてないし子供も産んでな」

ドッカーンッ!

「い?」

ボクが言い終わる前に近くで爆発が起きたようだ。爆発音と振動が伝わってくる。さすがと云えばいいのか、東の研究所だから音も振動もかなり小さいものだったが。

「例の転生者か……ボクが出るよ」

「きよーちゃんいつてらっしやいだよんっ」

東の声を背中に受けてボクは初めて研究施設の外へと足を踏み出した。

原作開始！……の前 よくわからない研究施設付近にて（前書き）

今回の敵は姿だけの偽者です。好きな方いらっしやいましたらすみません。

原作開始！……の前 よくわからない研究施設付近にて

外に出ると、そこには地平線まで広がった砂漠と、エミヤシロウの姿形をした転生者が居た。

「ふんっ、お前この俺に勝とうって言うのか？ 止めとけよ。俺にはかなわん。なんてっ たって俺には神が味方してるんだからな！」

ボクが外に出た途端そんなことを言いながら剣を投影して攻撃してくる転生者。

「キミがどう思ってるのかは知らないけど、ボクはそう簡単にはやられないよ」

「へっ、んなわけねーだろ！ 俺にかかればテメエなんて瞬殺なんだよー！！」

転生者はいきなりだが大技を使うようだ。

「I am bone of my sword .  
体は剣で出来ている。」

Steel is my body , and fire is my  
blood

血潮は鉄で、心は硝子。

I have created over a thousand  
blades .

幾たびの戦場を越えて不敗。

Unaware of loss .  
ただ一度の敗走もなく、

Nor aware of gain .  
ただ一度の勝利もなし。

Withstood pain to create weapons  
arrivals .  
担い手はここに独り剣の丘で鉄を鍛つ。

I have no regrets . This is the  
only path .  
ならば、我が生涯に意味は要ず。

My whole life was " unlimited blade  
works ."  
この体は、" 無限の剣で出来ていた" 。

転生者の詠唱が終わると、皆さん御存知のあの固有結界が展開される。  
欲望という名の雑念が溢れ出ていたが。

「くくくつ、死にな! !」

そこらの剣が全てこちらへ飛んでくる。が、その全てがボクに当たる直前に掻き消える。

「! ?」

「キミ、その程度かい? さっきキミが言ってたこととは話が違つ

ね？ ボクを瞬殺できるんじゃないのかい？」

「うわあ！？ ば、化け物！！ 来るな！！ 来んじゃない！！  
うわああああああ！！」

転生者は悲鳴を上げながら後退りし、石に躓いて頭を打つ。……  
気絶したようだ。そして辺りは元の砂漠に戻る。

そしてボクは転生者を少し調べてから存在ごと全世界から消滅させる。……すると反乱軍の神がごく一部判明した。アリスに報告かな。

(アリス、転生者の身体を少し調べたら反乱軍の神の一部が判明したよ。 と×××の癖が出てた)

(そう、ありがとう。こちらで処分するわね。……ごめんね、京。私から言い出したのに、私、あなたに会いたくて堪らないの……)

(大丈夫、アリスなら出来るよ、ボクが言うんだから間違いない。でも、本当に辛くなったら、いつでもおいで。そのときはそっちの仕事はゼウスたちに任せてそのままこっちで一緒に暮らそう？ もちろん今の転生者潰しは続くけど)

ボクとしてはアリスは安全なところに居てほしいんだけどね。

(あり……がと……私、もうちょっと頑張ってみるね…… ここからでも京をサポートできるように……)

(うん、がんばれっ！)

久しぶりのアリスとの会話が終わる。アリスはアリスで頑張っているのかあ…… はあ、会いたいなあ…… いや、アリスも頑張ってるんだからボクも頑張らないとっ！ よしっ、頑張るぞっ！

やることが終わったので研究施設に戻ってくる。すると……

「きよーちゃんってISなくても十分強くないかな……？」

「いや、今回は特別だよ。ボクの目的は転生者を消滅させることだし、ISを使わない戦闘で目立ったりしたら面倒だからISは必要だよ。それに、なるべく現地での戦い方をしないといけないんだ。変に世界に干渉してしまうといけないからね」

「ふむふむ、じゃあ東さんが裏からいろいろサポートしたげるよっ！  
面白そ      ゲフンゲフン、きよーちゃんに協力したいしねっ！」

「なにやら変な言葉が聞こえた気がするけど」

「ギクッ」

「サポートの件はよろしく頼むよ。東なら信頼できる」

「天才の東さんにまっかせなさいっ！ それくらい夕飯前だよっ！」

夕飯前ってまたえらく中途半端な……

「とりあえずあの試作機に名前つけようかな。……確か名前なかったよね？」

「ん？ あるよ？」

「？ あったの？」

「そうなのだよ。東さんがきょーちゃん用に頭を捻って考えた名前があるのだよっ！」

なんかいやな予感が……

「ずばりっ！ きょーちゃんのISの機体名はっ！ 『プリムラ・ポリアンサ』なのだよっ！」

人差し指をびしつとこちらへ向けて東が言う。

あれ？ 意外と変な名前じゃない……い……？

「東、頭でも打った？」

「？ 東さんはそんなドジは踏まないよ？」

「た、東がそんな変じゃない名前をつけるなんて……」

「むー、きょーちゃんそれはちょっと酷くないかな？ これでも東さんは夜中にこそつと花言葉調べ ゴホンゴホン 適当に頑張ったのだよ」

なにやらすごい頑張って考えてくれたらしい……

「東、ありがとう」



「こ、これくらい天才の束さんにかかれは昼飯前なのだよっ！」

あれ？ 束の顔が赤い。風邪かな？

ぴとっ

ボクの額を束の額とくつつける。……熱はないようだ。

「きよ、きよーちゃん！？……」

束はさらに顔を赤く紅潮させて気絶してしまった。本当にどうしたんだろっ……？

前回から続く回想終了

「束、いつてくるよ」

「きよーちゃんいつてらっしやーい」

束がそう言って近付いてくる。顔が異様に近い。

ちゅっ

……キスされた。唇に……

「ふえ！？ た、束！？」

(きょーちゃん、頑張ってるね。おねーさんは応援してるよ)

耳元で束がそう囁く。

「いってらっしゃーい」

「い、いってきます……」

そんなこんなでボクはIS学園へ出発した。

設定資料的なもの 7 / 5 追記しました(前書き)

ゼウスがほぼオリキャラと化しているので紹介です。実際に出てくるのはまだもう少し先の話ですが。

設定資料的なもの 7 / 5 追記しました

名前 神崎 京 (かんざき きょう)

種族 神族

職業 創造神 (全ての種族の能力や体質などを使うことが出来る。 (イノベーター含む) )

性別 男の娘 (作者は男の娘が好物です)

容姿 白い肌に腰まで伸びた透き通った金髪と、髪と同じく透き通った藍色の瞳が特徴の男の娘。身長は普通のサイズ。

性格 基本的に誰にでもやさしい。けど仲間には危険が迫ると悪魔も真っ青な威圧感で敵に迫る (そんな状況になるかは別として)。仲間と他人、どちらか一方しか助けることが出来ない場合は他人を犠牲にして仲間を助ける。そんな状況になるかは (ry  
しゃべり方は場合によっていろいろ使い分ける。

好きなもの

仲間、料理、読書など

嫌いなもの

仲間を傷つけるもの、食べ物を粗末にする人、命を粗末にする人など

専用機『プリムラ・ポリアンサ』

外見はガンダム00のダブルオーライザーを黒くしてIS風にし、クアンタのソードビットを装備したものの。

わざわざ装甲を展開するのは京の力が強すぎるからリミッターをかけるため。（作者の趣味でもある）リミッターをはずすとアリスや葵のように装甲がなくなり、神力によって武器を創造できるようになる。

束がつけた機体名は花の名前。花言葉は「運命をひらく、可憐、美の秘密」など。

待機状態は前作のはるかと同じく指輪型。プリムラ・ポリアンサの花の形をしている。展開するときはこれまた前作のはるかと同じく指輪に口付けする。

名前 神崎 アリス（かんざき ありす）

種族 神族

職業 “前” 創造神

性別 女

容姿 アリアも京と同じく容姿は好きなように変えられるが、普段は背が低く、腰まで伸びた金色の髪、京に負けず劣らずの顔をしている。京の都合によって容姿は変わる。

性格 初めは暗く、何をしてもつまらなかったが、京

と出会ってから全てが変わり、京と一緒になら何でも楽しいと感じて、明るく活発になる。京依存症？

好きなもの

京、京の料理、京の仲間などとにかく京に関係するもの

嫌いなもの

京に言い寄る女（認めた者の場合は除く）、京を苦しめようとするもの、京の大切なものを壊そうとするものなど

専用機『プリムラ・シネンシス』

外見は透明で普通に着ていた服そのまま、バリアがあるのみ。性能面はアリスの神力を使えるのみ。（神力で武器を創造することが可能）

京とは違い、リミッターは使わない。ポリアンサがリミッターをかけている状態ではシネンシスの方が強い。その状態で戦うと戦闘技術はほぼ同等なのでアリスが勝つ。

機体名は京と同じく花の名前。花言葉は「永遠の愛」  
待機状態はメノウのネックレス型。展開するときの動作は特にな  
い。

シネンシスは束との合作ではなく、京が束に依頼して作ってもらった機体。機体名はアリスが（勝手に）決めた。

名前            神崎 葵   （かんざき あおい）

種族 神族

職業 ゼウス（最高神）

性別 女

容姿 好きなように変えられる。昔は黒い髪の子の姿で京を誘惑しようとしていたが、京が来てからは女の子の姿で京を誘惑しようとして試みている。

女の子の姿のときも髪の色は変わらず黒く、瞳の色は少し青が混じった黒。

性格 昔は軽い腐女子だったようで、青年を演じていた。しかもその姿でBLを実現するべく動いていたが、最近は正しい？道を進んでいて、美少女の姿で京を誘惑しに行く。そのときの葵はアリスの天敵。

最近では自堕落な生活をしている。

好きなもの

京、友、はるか（前作主人公）、アリス

嫌いなもの

京を苦しめようとするもの、京の大切なものを壊そうとするもの、京を誘惑するときに邪魔をしに来るアリスなど

専用機『プリムラ・オブコニカ』

外見はアリスと同じく透明で普通に着ていた服そのまま、バリアがあるのみ。性能面はゼウスの神力を使えるのみ。（神力で武器を創造することが可能）

オブコニカはポリアンサがリミッターをかけたときと同等の強さ。戦うと戦闘技術の差で京が勝つ。

機体名は京やアリスと同じく花の名前。花言葉は「初恋、貫徹、幸福感」など。

待機状態はP P。バッテリーはシールドエネルギーが無くならない限りは無尽蔵。時々夢中になりすぎて貫徹する。展開は特定コマンドを入力することで可能。また、展開してもSPはなくならずそのまま残る。（プレイ可能）

オブコニカもシネンシスと同じく束との合作ではなく、京が束に依頼して作ってもらった機体。機体名はアリスと同じく葵が（勝手に）決めた。

この作品での創造神は最高神をも創造できる力を持った神のことで、神力は神のエネルギーです。

一作目の大幅改編のあとでこの作品とは切り離すことにしました。改編後の一作目側ではこの作品の話は一切出さない予定ですし、この作品側では改編前の一作目の話が出たままになるので、改編前の一作目主人公の設定を少ない上に無駄が多いですが、ここに書くことにしました。（内容は改編前の一作目の設定を多少端折ったも



のです) おそらく、殆ど本編には出てきません。ここから先は読まなくても問題はないかと思えます。

本来なら別作品ゆえに一作目の方との視点の違いが生まれるのでその辺りを楽しんでいけるような感じにしたかったのですが、やはり切り離すことにしました。

少し遅れましたが、ここでも報告します。一作目の大幅改編なんです、本当に大幅に改編しすぎて全く別作品になったために別の作品として投稿することにしました。

名前 神城 はるか (かみしろ はるか)

種族 人間(元神族)

性別 男の娘

容姿 透き通った白髪が肩の下辺りまで伸びている。普段は後ろでまとめている。(ポニーテールではない)

道を行けば男女関係なく振り向いてしまうほど整った顔立ちで、10人中9人は可愛いと答える程の女顔。俗に言う『男の娘』である。

性格 お人好し。人が危険に晒されると何をしても助けに行こうとする。

好きなもの

親しい人とのコミュニケーション全般

嫌いなもの

人に危険が迫る瞬間

専用機『白百合』

名前は適当です。男の娘設定からなんとなくきました。外見及び武装はコードギアスのランスロット・アルビオンで、待機状態は指輪型。展開するときには指輪に口づけする。

設定資料的なもの 7 / 5 追記しました(後書き)

今日はここまでです。また日曜日に更新しますので続きはそのとき。

では、失礼致しますね。

- 6 / 1 1 一部変更&追記しました
- 再び一部変更&追記しました
- 6 / 1 2 一部変更しました
- 6 / 1 3 一部変更しました
- 6 / 1 5 一部変更しました
- 6 / 3 0 追記しました
- 7 / 5 追記しました

ようやく原作開始……？

「私は先に教室に入る。京は呼ばれたら入ってこい」

今ボクは転校生としてここ、IS学園に来ている。なぜ転校生か、その理由は『プリムラ・ポリアンサ』を改造して遊んで ゲフンゲフン、いろいろとテストしてたらいつの間にか一ヶ月……とまではいかないけど、三週間ほど遅れてたんだよね。その間一切カレンダーを見ていなかったのも原因だけだ。

ちなみに千冬とはボクが天界からこっちへ降りてきたときからの友達。もちろんその“妹”の一夏や、一夏の友達の筈ともそこそこ仲がいい……はず。

「では神崎、入って来い」

「失礼します」

ボクが入った瞬間、教室はいきなり静かになり、全員がこっちに注目する。

「神崎 京です。趣味は千冬をからかうこと。ちなみに性別は男なので間違えないくださいね」

少し沈黙が続く、

「きゃあああああああ！！」

「男よ！ 男が来たわ！！！」

「かなり美形!! とうか可愛い!!」

「神様仏様!! 何でもいいから感謝します!!」

クラス中が大声で何かを叫んでいる。意味は理解したくない。

「趣味は千冬をからかうこと……っでもしかして千冬様と知り合い!?」

誰かがそんな疑問を叫ぶ。

「静かにしろ!!」

そこで千冬が濁をいれる。

「京……神崎は私の師だ。神崎がいなければ私のモンド・グロツソでの優勝はなかっただろう」

それを聞いてクラスはざわめきに包まれる。

「あの千冬様の師匠!？」

「強い!? 強いよね!？」

「ああ、京様〜! 私にお仕置きして〜!!」

うん、最後のは聞かなかったことにしよう……

「千冬ならボクがいなくても優勝してたと思うよ?」

「し、師匠……私は師匠がいなければそこまで強くはありませんでした。師匠に教えていただいたあの短い期間で私は強くなったのです」

あー、千冬の口調が……

「千冬、口調。今は先生でしょ？」

小声で千冬に言う。

「は、はい。 ああ、そうだな。静かにしろ！ 神崎、席に着け」

「はい。織斑先生」

ボクがそう言うと、千冬は少し顔を赤くしたが、そのまま授業に入った。

Side 一夏

はじめまして。私は織斑一夏。束姉さんに薦められてこのIS学園に入学して三週間。セシリアと決闘したりクラス代表になったりしている忙しかった。

この三週間のことを少し考えていると、山田先生から転校生が来たことを聞いた。さつきも二組に鈴が来たのね。そして、その転校生が教室に入ってきた。

ってあれ！？ 京さん！？

確か京さんって男の人だったよね……？ あの容姿だし、ついに男を止めちゃったのかな……

「神崎 京です。趣味は千冬をからかうこと。ちなみに性別は男なので間違えないでくださいね」

ふう、男は止めてなかったみたいだ……

少しほっとした一夏（ ）だった。

Side out 〱一夏〱

Side 〱セシリア〱

今日のSHRで、クラスに転校生が来たことをお聞きしました。

朝、二組の転校生がここに来ていましたけど……

「失礼します」

そう言っに入ってきた方は、なんと男の方でしたわ。

あの凛々しくてどこまでも透き通った藍色の瞳…… その瞳には明確な意思が宿っている。……わたくしも、クラスの方々をどうこう言えませんわね。

「神崎 京です。趣味は千冬をからかうこと。ちなみに性別は男なので間違えないでくださいね」

転校生の方が自己紹介をなさりましたわ。あのお方、京さんとお

っしゃるのですね……

「静かにしろ!!」

織斑先生の一声によってクラスのざわめきが消えましたわ。すごいですわね……

「京……神崎は私の師だ。神崎がいなければ私のモンド・グロツソでの優勝はなかっただろう」

織斑先生が少し顔を赤くしながらそう説明なされました。まさか織斑先生がライバルなのですか!?! ……勝てる気がしませんわ……いえ、勝てるか勝てないかではなく、やるかやらないかですわ!!

わたくし、負けませんわよっ! 織斑先生っ!

Side out くセシリアく

そしてあっという間に時は過ぎ、昼休み

「京っ!」

一夏に話し掛けられた。

「あ、一夏っ! 久しぶりく」

「久しぶりく じゃないよ! 今までどこ行ってたんだ!? 心配したんだぞ!?!」



「あー、そういえば一夏と篤には何も言っていなかったっけ。実はボク、東のところに住んだよ」

「東姉さんの？　　というか京って東姉さんと知り合いだったっけ？」

「ああ、フランスで会ってね、それからはずっと一緒だったよ？」

「ずっと!?!？」

「？　　うん、五年ほど」

「あー、ゴホンゴホン、京、久しぶりだな」

わざとらしい咳払いで話に入ってきた篤。

「ところで、あの人とはどういう関係だ？」

なにやら、拷問されるらしい。

「わ、わたくしも気になりますわ!」

そう言って話に入ってきた……えーっと、どちら様？

「ハッ!?　　申し訳ありません、自己紹介が遅れましたわ。わたくし、セシリア・オルコットと申します。これからよろしくお願いますわ、京さん」

「あ、うん、ボクは神崎京。よろしく」

「で、どういう関係なんだ？」

篤が訊いてくる。それに同調するように一夏とセシリアも頷いている。

「うーん、どついう関係か。かあ…… そんなの考えたことなかったなあ。強いて言うなら親友であり、研究仲間であり…… まあ、とにかく大切な存在かな。ボクにとっては」

「……………」

場を沈黙が支配する。

「恋人として、とかじゃないけどね」

そういつた瞬間、また活気が戻ってくる。……なんで？

「そ、それならいいのだ」

篤がうんうんと頷きながら言う。またそれに同調するように一夏やセシリアも頷いている。……だからなんで？

「とりあえず学食行こうか」

「ああ、そうだな」

「いいと思うよ」

「わたくしも一緒にしますわ」

篤、一夏、セシリアが賛同する。

結局その他の女子も数人ついてきて、ぞろぞろと学食まで移動する。

その学食で待っていたのが

「待ってたわよ、一夏!」

ようやく原作開始……？（後書き）

鈴ちゃんの転入と同じ時期にしてみました。

「一夏の特訓……のはず？」

「待ってたわよ、一夏！」

ボクたちの前になにやら一夏の知り合いらしい人が立ちふさがる。

「まあ、とりあえずそこどいて。食券出せないし、普通に通行の邪魔」

「わ、わかってるわよ……というかコイツ誰？」

ボクを指差して言う。

「あー、この間からすごい話題になってた唯一ESを動かすことのできる男子だよ。私の幼なじみの」

「！？ ……コイツが？ 女の子じゃないの？」

「！？ また間違えられた…… まあ、もうどうでもいいけどね、そんなの。」

「こんな可愛くて女の子でも憧れるような顔してても多分れっきとした男の娘だよ……多分」

「……やっぱりどうでもよくないです。ちゃんと男として見てください……」

「……………」

「ま、まあ、悪いと言われるよりはそっちの方がいいんじゃないか？」

ボクが軽く落ち込んでいるとそれに気付いた篤が慰めてくれる。  
篤は優しいなあ。

「そつえば、さっき一夏の幼なじみって言ってたわよね？」

「ああ、ボクは昔一夏の家の近所に住んでたんだよ。千冬に剣を教えながら」

「!?!? あの千冬さんの師匠……?」

「うん、あの千冬姉の師匠。正直信じられないよね? こんな可愛い子があの千冬姉の師匠なんて」

「あ、当たり前じゃないっ! あの千冬さんの師匠がこんなに可愛いなんておかしいでしょ!? 千冬さんの師匠ならムキムキのマッチョで黒人で リーズブルー キャップのビ―さんみたいなんじゃないの!?!」

「誰の師匠が リーさんだって?」

あ、弟子御本人登場。

「ち、ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。お前は私に喧嘩を売っているのか?」

「い、いいいえっ! 喧嘩なんて全くこれっぽっちも売ってません」

ですっ！」

なんか口調が激変した…… 千冬が苦手っばいね。

「それならいい。だが、私と、私の師匠を侮辱したらただで済むと思っなよ」

……怖ッ みんな怯えてるよ……

「千冬、それくらいでいいんじゃないかな？」

「あ、はい ああ、そうだな。では、私は仕事があるので失礼します。師匠」

やっぱりボクに対するしゃべり方は昔の癖が抜けないみたいだね。

「ところで、キミの名前は？」

とりあえず一夏の知り合い？に名前を訊いてみる。

「あたしは鳳鈴音。中国の代表候補生。気軽に鈴って呼んで構わないわよ」

「ボクは神崎京。ボクのこと京って呼んで構わないよ。よろしくね」

ニコツと笑顔で「よろしくね」って言ったら鈴の顔が赤くなった。

「うおっふおん!!、ところで鈴、いつ日本に帰ってきたの？おばさん元気？ いつ代表候補生になったの？」

すごい大げさな咳払いと共に一夏が鈴に質問する。

「質問ばっかしないでよ。それより一夏と京ってどんな関係？まさか付き合ってたりとかしてないでしょうね？」

「ふえ？ わ、私と京は付き合ってた……」

「付き合ってたないよ。ボクと一夏、箒は幼なじみ。そういう関係じゃないよ」

ボクがそう言うと、一夏がちょっと不機嫌な顔になる。

「そう……よかった……でも幼なじみって強敵よね……」

？ そう……の後が聞こえなかった……なんて言ったんだろう？

「京、今度あたしと」

「京は私にISの特訓をしてくれるから時間は空いてないよ」

「え？ そんな約束は」

「「したよね？」」

「はい」

最近の子は怖いなあ……



放課後

ボクは今、一夏の特訓のために第三アリーナに来ている。はずだった。途中で一夏、箒、セシリアの三名が“なぜか”口論になり、現在ISを使つての喧嘩（戦闘）にまでなっている。

「京は私のものだぁぁぁぁぁ！」

「いや、私だぁぁぁぁぁ！」

「いえ、わたくしですわっ！！！！」

……なんでこうなるの？

数分前

「じゃあ、今から特訓しようか。とりあえず一夏を強くすればいいんでしょ？」

「う、うん、そうだね。とりあえず私を強くしてくれるといいかな」

「一夏は近接戦闘メインだろうからとりあえず素振り10000回っ！！！」

「………はい？」

「京、それは少しやりすぎだと思つぞ？」

「そ、そうですね。もう少し回数を減らしたほうがいいのではな  
いかしら？」

三人ともやりすぎという意見のようだ。

「そうかなあ？ これくらい千冬なら普通にやってたぞ？」

「千冬姉と一緒にすんなー！」

一夏に怒られた。

「じゃあとりあえず1000回でいいよ。今回だけ大サービスで10分の1にしてあげるよ」

「いや、それもまだきつ」

「いいから始めっ！！ 時間がもったいないっ！！」

「は、はいつー！！」

一夏がまだ文句を言おうとしたから時間がもったいないという理由で無理矢理始めさせた。

「一夏、型が崩れてる」

「は、はいつー！！」

「直ってないっ。そこはこっつ」

一夏の後ろに回り、自分の手を剣を握る一夏の手添えて、正しく動かす。

「あぁっ！？　一夏ああああ！　ずるいぞっ！！　私も　」

「いえ、わたくしですわっ！！！！」

いきなり箒とセシリアが凄い剣幕でこちらへと向かってくる。  
…怖い

「うわ、何すんだよ箒っ！　セシリアっ！　私を殺す気か！！」

二人はボクではなく、ボクの目の前に居た一夏に襲い掛かる。それに一夏が応戦して……喧嘩（戦闘）が始まる。

「京は私のものだああああ！！」

「いや、私だああああ！！」

「いえ、わたくしですわっ！！！！」

はぁ、そろそろ止めないとまずいよね？……あっ！　一夏の実践訓練になるし放っとしてもいいか。

数分後

「うわっ！！　二対一はずるいっ！！！！」

「お前の方がもつとずるいっ！！！！」

「あなたの方がもつとずるいですわっ！！！！」

「なんでだよおおおお！！！！」

さらに数分後

「はあ、はあ、はあ、はあ………」

「お、追い詰めましたわ………」

「一夏、覚悟………」

箒が怖い。今度こそ止めよう。

「そろそろ止めたほうがいいんじゃないかな？ 一夏もボロボロだし」

僕がそう言うと、三人同時にこちらに振り向く。……顔が怖い。

「そういえば、こうなる原因を作ったのは京さんでしたわよね？」

「ああ、そうだな」

「でも私は幸せ」

「お前は黙ってるっ!!」

「あなたは黙ってなさいっ!!」

「はい」

一夏が圧倒された!?

「原因を作った京さんには、少しお仕置きをしないとイケませんわね？」

「ああ、そうだな」

二人の笑顔が黒い。いや、むしろ赤黒い。

「ふふふふふふふ」

笑いながらにじり寄ってくる二人。その後、第三アリーナには京らしき声の悲鳴と、顔を真っ青にした一夏、そしてなにやらすすきりした様子の篤とセシリアが居たとか居ないとか。

## 謎のISの襲来

一番最初の特訓のときはいろいろあったものの、それからは大した事件もなく、順調に一夏の特訓は進んでいき、ついにクラス対抗戦の一回戦当日を迎えた。

「一夏、私と京……とついでにあの金髪女が特訓したのだから必ず勝て。確実にだ」

篝のこの発言、絶対口論になるって……

「ちよっ、ついでとはなんですかついでとはっ！」

ほら、やっぱり。

「ついでではついでだろう。特訓は主に京がやっていたではないか」

そう、実は一夏の特訓の殆どはボクがやっていた。というか二人とも教え方が下手。篝の説明は漠然としてるし、セシリアの説明は細かすぎて一夏が混乱する。

「うっ…… ですがそれを言うとあなたもついでですわよ？」

「うっ…… な、何を言うかつ！ 私は……今思えば殆ど何もしてないな」

「それに比べわたくしは……殆ど何もしていませんわね」

結局は殆どボク一人で一夏の特訓をしていたらしい。

「とりあえず一夏、頑張れっ！」

とりあえず一夏に応援の声をかける。

「うん、勝てるかは別として、出来る限り頑張ってくるよ」

そう言つて一夏は既に鈴のIS『甲龍』の待つフィールドへと向かった。

Side 一夏

「来たよ。鈴」

「よく逃げなかったわね、一夏。今からでも逃げる？ IS使い始めて数週間の人間に負けるほどあたしは弱くないし、手加減もしないわよ？」

鈴が挑発してくる。けど、その挑発には乗らない。

「私は大丈夫だよ、鈴。それより鈴の方は逃げないの？ 私、この数週間で京にみっちり特訓してもらったからかなり強いよ？」

「んなつ！？ に、逃げるわけないじゃない！！ どうしてあたしがアンタから逃げないといけないのよ！！」

今度はこちらが挑発する。すると面白いほどにその挑発に乗ってくる。……もう少し挑発しようか。

「あ、それとも手加減した方がいいのかな？」

「んなわけないでしょ!! 一夏!! アンタ、本気で倒してあげるから覚悟しなさいよねっ!!」

鈴が叫び終わった瞬間に試合開始のブザーが鳴る。

そのブザーが鳴った瞬間に鈴のISから何か、衝撃波のようなものがこちらに向かって発射された。それをひらりと避けると、鈴に接近するべく機体を加速させる。

(見える…… 身体が、しっかり反応できる…… ISが、自分の手足のように動かせる!)

京の特訓のおかげか、さっきの挑発か、その後も接近には手こずっているものの、余裕で避け続ける。

「な、何であたらないのよ!？」

鈴はだんだんとムキになってきたようだ。さっきから少しずつ狙いが甘くなってきたている。

(この戦い、勝てるっ!!)

Side out 一夏

Side 鈴

試合当日、あたしは一夏が来る前には既にアリーナで待機してい



た。

あのとき、一夏に会いに食堂まで行ったときにあたしは京に出会った。会った瞬間、まず思ったことは「可愛い子だな」って少し気になったけど、男だつて聞かされてもつと気になるようになった。そして自己紹介のときの笑顔はすごく素敵だと思った。

……京とはいい友達になれそうね。

「来たよ。鈴」

そんなことを考えているうちに一夏が来たみたい。とりあえず警告しとかないと。

「よく逃げなかったわね、一夏。今からでも逃げる？ IS使い始めて数週間の人間に負けるほどあたしは弱くないし、手加減もしないわよ？」

「私は大丈夫だよ、鈴。それより鈴の方は逃げないの？ 私、この数週間で京にみっちり特訓してもらったからかなり強いよ？」

「んなつ！？ に、逃げるわけじゃない！！ どうしてあたしがアンタから逃げないといけないのよ！！」

あたしがそう言うと、一夏が

「あ、それとも手加減した方がいいのかな？」

なんてことを言ってきた。あ、あたしが数週間の特訓しかしてないヤツに負けるわけじゃない！！

「んなわけないでしょ!! 一夏!! アンタ、本気で倒してあげるから覚悟しなさいよねっ!!!!」

あたしが言い終わった直後に試合開始のブザーが鳴った。

ブザーが鳴り終わった瞬間に先手必勝とばかりに龍砲を一夏に向けて撃つ。 けど避けられた。

その後も撃ちまくるけど一発も当たらない。それどころか、余裕を持って避けられている。

「な、何であたらないのよ!?!」

あたしは少し焦っていた。この龍砲をここまで余裕で避けられ続けたのは初めてだったから。だから動揺してしまった。あの、謎のISの攻撃に気が付かなかった……

Side out 〔鈴〕

Side 〔京〕

一夏と鈴の試合は鈴が押している“ように見える”。実際は鈴はただ撃ちまくっているだけで、一夏に全て避けられている。しかも一夏はいつでも反撃できるようにと準備しながらその機会を伺っている。

この勝負、一夏の勝ちだね 何だ? これは……無人機? アリーナをロックしている……? ?

次の瞬間、第二アリーナに衝撃が走った。

Side out 〱京〱

Side 〱一夏〱

(この戦い、勝てるっ!!)

ズドオオオオンッ!!!

そう思って反撃に移ろうとしたそのとき、突然辺りに衝撃が走り、爆炎と真っ黒な煙が上がる。

「きゃああああ!?!」

「鈴っ!?!」

鈴が爆発に巻き込まれた

Side out 〱一夏〱

Side 〱鈴〱

あたしは少し焦っていた。この衝撃砲をここまで余裕で避けられ続けたのは初めてだったから。だから動揺してしまった。あの、謎のISSの攻撃に気が付かなかった……

ズドオオオオンツ！！！！

あたしの目の前でISの武器による爆発が起こる。　あたしはそれに巻き込まれた……はずだった。

目の前には、黒いISが爆発からあたしを守るように静止している。その機体は、綺麗な粒子を放出させている。

あたしは完全にその姿に見惚れていた。

「鈴、大丈夫？」

「へ？　きよ、京！？　あ、アンタ、専用機持ってたの！？」

「うん、そう。この機体はボクの専用機『プリムラ・ポリアンサ』。束とボクの合作かな、この機体は」

京は信じられないことをさらっと言っただけだ。

「束……ってあの篠ノ乃束博士！？　篠ノ乃博士との合作って……」

「うん、その篠ノ乃束博士。五年ほど一緒に居たからそのときに」

「五年！？」

……五年も一緒だったなんて……篠ノ乃博士とどんな関係なんだろう。すごく気になる……あれ？　どうしてそんなことが気になるのよあたしは。別に京のことなんて

「鈴？　少し苦しそうな顔してるよ？　大丈夫？」

いつの間にかあたしは少し苦しそうな顔をしていたらしい。それに心配されたとわかると高鳴る鼓動……やっぱりあたしは京のことが

「うん、大丈夫。心配しないで」

いつの間にか好きになってた。

今まであたしは、京のことを友達として好きなんだと思っていた。だから言う前に一夏に遮られたとはいえ、一緒に買い物に行きたいと思って誘おうとしたり、仲良くなりたいと思っっているいろいろ考えたりもした。

でもそれは“あたしは京のことが好きだから”。全てはその感情によって動いていた。そう、それに気付いてしまった。

気付いてしまったらもう後には引けなくなる。あたしの感情が、後に引くことを拒んでしまう。一夏や、千冬さんの片思いの相手だとわかっていても……

S i d e o u t 〈鈴〉

## 謎のISの襲来（後書き）

今日はここまでです。最後まで見ていただき、ありがとうございます。もしよろしければ今後の参考のため感想を書いていただくと非常に嬉しいです。

次の更新は木曜日になります。

今回まではなるべく早く一作目に追いつかせるために複数同時に投稿していましたが、今回のでストックが限りなく0に近くなってしまうため、次回からは1つずつの更新になりそうです。

京&一夏&鈴VS無人機X15機（前書き）

今回はも大部分が妄想で出来ています。……たまには真面目なのも書いてみたりしようかな……

今回変えたタイトル『IS インフィニット・ストラトス』運命を開くらうたき花』は篝ちゃん仕様（古文モドキ）です。

京&一夏&鈴VS無人機X15機

Side 一夏

ズドオオオンツ!!!

「きゃああああ!?!」

「鈴!?!」

鈴が爆発に巻き込まれた。

辺りには爆発の影響で黒煙が上がっている。

「鈴っ!!!」

必死に呼んでも鈴は応えない。

しばらくして黒煙が薄くなってくると鈴の甲龍と、その目の前に見たこともない黒いISが……って京!?!

Side out 一夏

Side 京

ボクは爆発に甲龍が巻き込まれそうなのを確認すると爆発寸前にソードビットを使い、甲龍の目の前にGNフィールドを展開、その後すぐにソードビットと甲龍の間へと入る。



「鈴、大丈夫？」

「へ？ きよ、京！？ あ、アンタ、専用機持ってたの！？」

ボクが無事か訊ねると、この機体のことに驚かれた。まあ、ボクが専用機を持つてるなんて話さなかったし、このことを知っていたのも千冬を含むIS学園の一部のみ。驚かないはずがない。

「うん、そう。この機体はボクの専用機『プリムラ・ポリアンサ』。この機体はコア以外の全ての部品が東とボクの合作だよ」 コアも合作といえば合作だけだね。

とりあえずこの機体の自己紹介から。事実を簡潔に述べる。

「東……ってあの篠ノ乃東博士！？ 篠ノ乃博士との合作って……」

その自己紹介にさらに驚かれた。まあ、こちらもそうなるのに無理はない。東は失踪したことになるし、その東との合作だといえは驚くのが普通だ。

「うん、その篠ノ乃東博士。五年ほど一緒に居たからそのときに」

「五年！？」

再び驚かれる。……最近の子は何かを言われるたびに驚くのかな……？ いくらなんでも驚きすぎだよな。

？ 鈴が少し苦しそうな顔をしている。

「鈴？ 少し苦しそうな顔してるよ？ 大丈夫？」

「うん、大丈夫。心配しないで」

ボクが話しかけると、何かを決意したような顔で応える。

……徐々に黒煙が晴れてくる。……敵ISは……15機。しかも  
全て無人機で僅かに神力を感じる。 反乱軍の引き金か？

「鈴、一夏、アレには近付くなよ」

それだけ言って敵ISの居る上空へと向かう。

「貴様ら、何の目的で世界を壊そうとする。トップは誰だ？」

当たり前だが、返答はない。

「なら……全て落とす」

そう言った瞬間、全ての無人機からの攻撃が開始される。 鈴  
への攻撃が。

Side out 〔京〕

Side 〔鈴〕

黒煙が晴れて、徐々に周りが見えるようになってくる。

「鈴、一夏、アレには近付くなよ」

京がいきなりそう言って粒子を放出しながら上空へと向かう。  
上空には15機の謎のISがいた。おそらく、あたしが巻き込まれそうになった爆発はあのISによるもの。

だとしたら、あのISはアリーナの遮断フィールドをも突破できる火力を持った機体ということ……京、大丈夫よね？

やっぱりあたしも行った方がいいわよね？ 隣にいる一夏は行くみたいだし。

全ての敵ISからビームが放たれる。それは全て一直線にあたしの方へと向かって ってなんであたし!？

避けようとした……けど後ろには第二アリーナがある。そして敵ISは遮断フィールドも突破できるほどの火力……あたしが避けたら他の多くの人……なら、あたしが盾に

ドオオオオッ!

目の前で爆音がした。あたしには攻撃が届いていない。どうして？

その答えは単純だった。あたしの前で攻撃を受けた機体がいる。一夏の白式 の、さらに前で攻撃を受けた機体。京の専用機『プリムラ・ポリアンサ』だった。

「一夏、鈴、大丈夫？」

「う、うん……あたしは大丈夫だけど……」

「え？ あ、う、うん、だ、大丈夫……」

一夏が狼狽える。 やっぱり一夏も……

「……そういえば京の機体、上空にいたわよね？ どうやってビームより先にここまで来たのよ」

「ああ、普通に移動しただけだよ。わざわざ空間跳躍する必要もないしね」

「普通に移動してこの速さ！？ 空間跳躍！？」

「うん。ボクと束の合作だから。一夏と鈴は戦闘には参加しないで。あのISは……おそらくボクのせいでここに……だから、ボクが倒さないと」

あー、なんかイラッとしてきた。

「あたしはっ！！ アンタと一緒に戦いたいのよ、京っ！！！」

「うん、私も京と一緒に戦いたい。少しでも京の役に立ちたい」

一夏も同じ意見みたいね。

「……仕方ない。今回だけだよ。もう一人一緒に戦うのが条件だけ」

「もう一人？」

「あとで来るからそのときに。とりあえずあの15機の敵ISSを倒そうか」

正直に言うともう一人がすごく気になった。まさか女の子じゃないでしようね？……今そんなこと考えても仕方ないし、とりあえず倒してやるうじじゃないっ！

そう思って敵ISSに近付こうとすると、敵ISSが一斉にビームを放つ。あたしはそれを全て避けた。つもりだったが、その全てが途中で曲がって一つ残らずあたしに命中した

S i d e o u t 　　く　鈴く

S i d e 　　く　一夏く

「鈴、一夏、アレには近付くなよ」

そう言って京は上空の敵ISSに近付く。

さすがに京でも15機のISSを一度に相手にしたら……

よし、私も行って一緒に戦おう。

私はそう考えて京の方へと向かう。鈴も私と同じで一緒に戦いに行くみたい。　あっ、敵ISSがビームをツ。鈴っ！！

私は咄嗟の判断で鈴の前に出る。

ドオオオオンッ！

私の“目の前”で爆発が起きる。 黒いISが私の前に出て助けてくれたみたい。

……綺麗だなあ……

黒いISと、そのISが放出している粒子に私はつい、見惚れていた。

「一夏、鈴、大丈夫？」

「う、うん……あたしは大丈夫だけど……」

「え？ あ、う、うん、だ、大丈夫……」

びっくりしたあ…… ポーっとするときいきなり好きな人に話しかけられると驚いちゃうよね。 っていうか京、ついさっき上にいたよね？ どうやって来たんだろう？

「……そういえば京の機体、上空にいたわよね？ どうやってビームより先にここまで来たのよ」

私が京に訊こうとすると、同じことを考えていたのか鈴が先に質問する。

「ああ、普通に移動しただけだよ。わざわざ空間跳躍する必要もないしね」

「普通に移動してこの速さ!? 空間跳躍!？」

「うん。『プリムラ・ポリアンサ』はボクと束の合作だから。一夏と鈴は戦闘には参加しないで。あのISは……おそらくボクのせいでここに……だから、ボクが倒さないと」

京がいきなり戦闘に参加するなって言ってくる。あのISがここを襲ったのは自分のせいだと言って　京、私はね

「あたしはっ！！　アンタと一緒に戦いたいだよ、京っ！！！」

ありゃ、また鈴に先を越されちゃった。

「うん、私も京と一緒に戦いたい。少しでも京の役に立ちたい」

私も意思表示する。

「……仕方ない。今回だけだよ。もう一人一緒に戦うのが条件だけ」

「もう一人？」

「あとで来るからそのときに。とりあえずあの15機の敵ISを倒そうか」

……もう一人って女の子かなあ？　……多分そうだよな。でも、今そんなことを言っても仕方ないし、今は敵ISを倒すことに集中しよう。

私がそう考えている間に鈴は先に行ってしまったみたい。私も鈴に負けないように頑張らないとっ……！！

全ての敵ISから鈴へとビームが放たれた。鈴はそれを全て避けた……はずだった。途中で全てのビームが曲がり、全て鈴に命中した。あの、アリーナの遮断フィールドをも突破できるビームが……

S i d e o u t 　↳一夏↳



**京&一夏&鈴VS無人機X15機（後書き）**

次回に登場予定のもう一人、もうみなさんお分かりですよね・・・  
？

そうなんです、あの娘なんです。（どの娘だよ！）

次回は一応日曜日に更新予定です。

京&一夏&鈴&葵 VS 無人機 X 15機 その一

Side 〱 鈴〱

敵ISに近付こうとすると、敵ISが一斉にビームを放つ。あたしはそれを全て避けた……つもりだったけど、その全てが途中で曲がって一つ残らずあたしに命中した。はずだった。

「なんで……？」

あたしは、“無傷で”飛び続けている。あたしの目の前にはだぼだぼの服を着て寝癖がライオンみたいに見えるどこからどう見ても寝ぼけた瞳の女の子が飛んでいた。……P Pを持って。

「きょ〱お〱、ね〱む〱い〱」

「呼び出しちゃってごめん、葵。眠いのは我慢して」

まさかこの子が京が言ってたもう一人……？

「眠いのは大丈夫っ！ 私、最近京のためなら朝だって起きるし顔洗うし歯も磨くし寝癖だって直してるよっ！！ だから私は京のためなら眠いの我慢でも何でも出来るっ……！！」

「いや、それボクのためとかじゃなくて当たり前だと思っよ？ 葵

……あと、今日は寝癖が直ってない」

「ええ〱、だって私たちだと……を使えばそんなの必要ないじゃな

い。……今日の寝癖は寝てるときにいきなり呼び出されたからだよ

……何を言えば、なのよ……？

「葵、今はもうすぐお昼の時間だよ？」

何というかこの娘

「うっ……京のいじわるっ」

自墮落娘？

「うおおっふおんつつっ！！！！ 京、その娘は？」

一夏が最早咳払いなのかも怪しい奇声を上げて強引に話に入る。

「この娘は神崎葵。言ってたもう一人の娘だよ」

「神崎葵だよっ！ よろしくねっ」

「この娘が……？ なんかの間違いじゃなくて？」

そう、この葵って娘、全く強そうには見えないのよね。……でも機体の性能が異様にいいのは確かね。あの敵ISの攻撃を軽く凌いでたし。

「間違いじゃないよっ！！ 私であってるよっ！！」

「ほんとに……？」

疑り深く訊いてみる。

「何の間違いでもないよ。葵はボクが戦いにおける強さの面でも信頼を置く人だから大丈夫」

「えへっ さっすが京っ、わかってるねっ」

「……とりあえず敵IS倒そうか」

京に言われてハツとなる。そういえば今、敵と戦ってたんだっけ。全く攻撃が来ないから忘れてた……

Side out 〱 鈴〱

Side 〱 一夏〱

鈴に向けて放たれたビームの全てが曲がり、鈴のIS『甲龍』に吸い込まれるように一つ残らず命中した。 と思った。

ビームが迫ってから、当たる直前にP Pを持ったライオン頭の人がいきなり現れてビームを全て受け止めた。

「きよ〱お〱、ね〱む〱い〱」

「呼び出しちゃってごめん、葵。眠いのは我慢して」

この娘、京の知り合いかな……？

「眠いのは大丈夫っ！ 私、最近京のためなら朝だって起きるし顔洗うし歯も磨くし寝癖だって直してるよっ！！ だから私は京のためなら眠いの我慢でも何でも出来るっ！！！」

「いや、それボクのためとかじゃなくて当たり前だと思っよ？ 葵…… あと、今日は寝癖が直ってない」

「ええ、だって私たちだと…… を使えばそんなの必要ないじゃない。…… 今日の寝癖は寝てる時にいきなり呼び出されたからだよ」

「？？ 私たちだと…… を使えば って何を使うんだろう……？  
！？ まさか京を【見せられないよっ！】とか【閲覧規制】させたりして使ってるの！？ なんてあの子だけ……」

「うおおっふおんっっ！！ 京、その娘は？」

少し咳払いに気合が入りすぎた…… でもあの娘のことを訊くというミッションは無事成功。

「この娘は神崎葵。言っただもう一人の娘だよ」

「神崎葵だよっ！ よろしくねっ」

神崎……？ 神崎って京の親戚か何かかな……？ いやもしかして

敵IS倒そうか」

京の声を聞いてハッとする。どうやら私は思考の海へと出ていたらしい。……京、あとでみっちり聞かせてもらうからね？

Side out ～一夏～

Side ～京～

鈴が近付こうとすると、無人機は一斉にビームを放つ。鈴はそれを全て避けようとしますが、全てのビームが鈴に直撃するコースへと曲がる。間に合った。

「なんで……？」

鈴がそう呟く。無理もない。鈴にビームが一つも当たっていないのは“直撃前にそれを全て代わりに受け止めたIS”が居るから。

そのISは装甲がなく、バリアのみ展開している。

「きょ～お～、ね～む～い～」

「呼び出しちゃってごめん、葵。眠いのは我慢して」

そう、この娘はボクが呼び出したもう一人の子、神崎葵。彼女はあの最高神ゼウスという“職業”に就いている。そのため、そこらの下級神などは一瞬で消し飛ばせる。今回は少し位が高いけどこの

程度なら同様に消し飛ばせる。

けど、例の如くそんな荒っぽいことはせず、現地の武装、強さになるべく近い手段で消すことを優先する。

「眠いのは大丈夫っ！ 私、最近は京のためなら朝だって起きるし顔洗うし歯も磨くし寝癖だって直してるよっ！！ だから私は京のためなら眠いの我慢でも何でも出来るっ！！！」

そんなことを考えていると、葵からの返事が返ってきた。

「いや、それボクのためとかじゃなくて当たり前だと思うよ？ 葵

……あと、今日は寝癖が直ってない」

とりあえず思ったことをそのまま口にする。

「ええ〜、だって私たちだと神力を使えばそんなの必要ないじゃない。……今日の寝癖は寝てるときにいきなり呼び出されたからだよ」

『神力』の部分だけをプライベート・チャンネルで伝えてくる。

「葵、今はもうすぐお昼の時間だよ？」

「うっ……京のいじわるう〜」

ふっ、ボクを相手に誤魔化そうなんて一万光年早いよ。

「うおおっふおんっっ！！ 京、その娘は？」

一夏が無駄に気合の入った咳払いと共に葵のことを訊いてくる。

「この娘は神崎葵。言ってたもう一人の娘だよ」

「神崎葵だよっ！ よろしくねっ」

ボクが葵の名前だけの簡単な自己紹介を言い終えると、ほぼ間を開けずに葵が自分で自己紹介をする。ハイテンションだなあ。

「この娘が……？ なんかの間違いじゃなくて？」

やはりというか、何というか葵の見た目のせいで信じてもらえなかったみたい。

「間違いじゃないよっ！！ 私であってるよっ！！」

「ほんとに……？」

間違いないという葵に疑い深く問う鈴。……一夏は何か考え事をしているのか俯いている。

「何の間違いでもないよ。葵はボクが戦いにおける強さの面でも信頼を置く人だから大丈夫」

「えへっ さっすが京っ、わかってるねっ」

ボクが葵が強いということを明確に話すと葵が嬉しそうにする。  
でもさ……

「……とりあえず敵IS倒そうか」



ここには敵を倒しに来たの、覚えてる？

Sideout 〽京〽

京&一夏&鈴&葵VS無人機X15機 その二(前書き)

今回はたまたま完成していたので2話連続投稿です。

京&一夏&鈴&葵 VS 無人機 X 15機 その二

Side (葵)

(葵、こっち来てくれないかな?)

寝てたらいきなり、京が私にそう言ってくる。私は事情も聞かずにおーけーを言っただけのまま京の元へと降りようとする。

(来てくれるのは嬉しいんだけど、ちょっとその前にしてほしいことがあるんだ。一応キミ専用の機体を制作してもらってるから、それを篠ノ乃東さんのところに取りに行ってから来てくれないかな?)

(りょうかい! 任せて、京!)

私は京にあまり頼られたことがなかったから少し張り切ってた。その篠ノ乃東さんのところへ向かった。

「ここが京の言ってた場所……?」

京の言ってた場所に来たはいいけど、どこを見ても樹以外のものを見つけない。

「キミがきょーちゃんの言ってた神様かい?」

「!?!?」

いきなり背後から話しかけられた。振り向いても誰もいない。

「……………?」

「どうやら、この新しいステルスシステムは神様でも見抜けないみたいだね」

そう言っつて、いきなり何もなかったところから人が現れる。

「……………キミが京の言っつた篠ノ乃東さん?」

「そ。このISをキミに渡すようきょーちゃんに言われた篠ノ乃東さんだよっ! はる」

……………なんかこのノリには私でもついていけなさそうな気がする。

「私は神崎葵。京の部下、最高神に就いてる。よろしくね?」

「神崎……………? まさかきょーちゃんの子供……………?」

!?!? なんで子供と勘違いされるの!?!? ねえ、私一応京より年上なんだよ?

「違う!! 私京のおねーさんだよ!!」(嘘です。おねーさんの立場だったことはあるけど)

「ちつ、きょーちゃんの子供だったら今ここで抹殺してるところだったのに……………」

なんか怖いこと言っつてる!?!?

「はい、とりあえずこれがキミのIS。それと、こっちはきよーちゃんに頼まれてたもう一つのIS。これはきよーちゃんに渡すんだよんっ！」

東さんにP Pとネックレスを渡される。

「このネックレスは京に渡せばいいの？」

「うん、そう。そっちはきよーちゃんに。P Pはキミに」

私の質問に丁寧に応えてくれる。

「わかった。ありがとう。東」

「東さんはきよーちゃんに頼まれたから仕方なくやったただだよっ！」

東はそんなことを言うけど、少し照れたような顔を見ると全く信憑性がない。……素直じゃないなあ。

「じゃ、そろそろ行くね？ また会おう。東」

「またいずれ、会うことになるよ。あおちゃん」

……あおちゃんって何？

S i d e o u t 〈 葵 〉

S i d e 　　束

「ここが京の言ってた場所……？」

きよーちゃんが言ってた通り、束さんの研究所の前にライオン頭の人 came 来た。

「キミがきよーちゃんの言ってた神様かい？」

「！？」

背後から話しかけるとビクッてなつてこっちに振り向く。

「……………？」

「どうやら、この新しいステルスシステムは神様でも見抜けないみたいだね」

そう言いながらステルスを解除する。……さすが天才の束さんが作ったステルスだけあつて神様でも見抜けないみたい。

「……………キミが京の言ってた篠ノ乃束さん？」

「そ。このISをキミに渡すよきよーちゃんに言われた篠ノ乃束さんだよっ！　はる」

「私は神崎葵。京の部下、最高神に就いてる。よろしくね？」

「こっちが自己紹介すると自己紹介で返してくる。

「神崎……？ まさかきょーちゃんの子供……？」

東さんがそう言つとまたビクツとなつて、今度は怒りのオーラ全開

「違うー！ 私 は京のおねーさんだよー！」

まさかのお姉さん！？ この身長この体型で！？ ……ふふふ、子供じゃなくてよかつたねえ？

「ちつ、きょーちゃんの子供だったら今ここで抹殺してるところだったのに……」

ふふふ…… あおちゃんが少しびっくりしたような顔してる。

「はい、とりあえずこれがキミのIS。それと、こっちはきょーちゃんに頼まれてたもう一つのIS。これはきょーちゃんに渡すんだよんっ！」

そう言つて東さんがあおちゃんにISを渡す。

「このネックレスは京に渡せばいいの？」

あおちゃんが東さんに訊いてくる。

「うん、そう。そっちはきょーちゃんに。P Pはキミに」

いつもより、少し丁寧に伝えてみる。      ただ単に気分がよかつただけだよっ！！

「わかった。ありがとう。東」

あおちゃんがお礼を言ってくる。

「東さんはきょーちゃんに頼まれたから仕方なくやったただけだよっ」！

東さんは今日はちょっと気分がよかつただけだよっ！！

「じゃ、そろそろ行くね？ また会おう。東」

あおちゃんはもう行くみたい。

「またいずれ、会うことになるよ。あおちゃん」      きょーちゃんは東さんのものだからね。

Side out 　　～東～

Side 　　～葵～

東のところを出発して京のいるIS学園まで一気に飛ぶ。……も  
ちろん私の新しいIS『プリムラ・オブコニカ』を使っている。



機体名は京のISが『プリムラ・ポリアンサ』っていう花の名前  
みたいだから同じ『プリムラ』である『プリムラ・オブコニカ』っ  
ていう名前をつけた。

そろそろIS学園に着 あっ、ビームがつー！

私はビームを見た瞬間ISを一気に加速させて、ビームが京の仲  
間のISに当たる前に全て受け止める。

「なんで………？」

S i d e o u t 　〈葵〉

京&一夏&鈴&葵VS無人機X15機 その二(後書き)

最後、いかにも続くような終わり方ですが、続かずに前話の続きからになります。

次回はまた木曜日に。

京&一夏&鈴&葵VS無人機X15機 その三(前書き)

今回変更したタイトルがすごいことになりましたw

『是 無限・斯特拉托斯 〵開放的命運美麗的鮮花〵』

……鈴ちゃん仕様(中国語)はインパクトがありますねw

京&一夏&鈴&葵 VS 無人機X15機 その三

Side (鈴)

「……とりあえず敵IS倒そうか」

京に言われてハツとなる。そういえば今、敵と戦ってたんだっけ。全く攻撃が来ないから忘れてた……

「京、さっきアリーナの外で見たんだけどね、この敵IS、14機は偽者だよ？」

葵さんがいきなりとんでもないことを言う。

「な、何言ってるのよ！！ ISを通して見ても全部実体なんだから偽者なわけないじゃない！！」

「アレはね、私と京の故郷が関係してるのよ。だからIS通して実体ってなっても実際は偽者なんだよ」

故郷……？

「京と葵さんの故郷って日本じゃないの？」

一夏が訊く。

「そうだけど違う。もっと近くて遠いところだよ。ボクたちの故郷は」

わけがわからない。けど、何かあたしたちには言いたくても言えないことがあることはわかったわ。

「そっか……じゃあ、京や葵さんが言いたくなるまで待つわ。一夏も待つでしょ?」

「うん、私も。京や葵さんがちゃんと言えるときまで待つよ」

やっぱり一夏とは同意見ね。さっすがあたしの幼なじみ。

「うん、ありがとう。いつかは絶対全部話すから……それまでは待つて……」

「……ありがとね? 私、絶対事情とかしつこく訊いてくるものだと思っただから、すごく嬉しい」

2人にお礼を言われる。

「そんなお礼言われることじゃないってっ! あたしは、当たり前のことを言っただけ」

「そんなお礼言われることじゃないよっ! 私は、当たり前のことを言っただけだから」

一夏と同時に殆ど同じことを言う。……さすが親友だけあって息が合うわね。

「えーっと、それでね、京、偽者を作って制御しているのは」

「敵が作った詳細不明の装置……でしょ?」

「そつっ！ さすがは京っ！ よおくわかってるう！」

……どういふことなのよ？

Side out 〔鈴〕

Side 〔京〕

「……とりあえず敵IS倒そうか」

「ここには敵を倒しに来たの、覚えてる？」

「京、さっきアリーナの外で見たんだけどね、この敵IS、14機は偽者だよ？」

おお、葵は覚えてたみたいだ。      ん？ 偽者？ ……そついうことか。

「な、何言ってるのよ！！ ISを通して見ても全部実体なんだから偽者なわけじゃない！！！」

「アレはね、私と京の故郷が関係してるのよ。だからIS通して実体ってなっても実際は偽者なんだよ」

ちよ、葵、バレるって。

「京と葵さんの故郷って日本じゃないの？」

はあ……仕方ない。覚悟を決めよう。

「そうだけど違う。もっと近くて遠いところだよ。ボクたちの故郷は」

バレるのを覚悟して話す。

「そっか……じゃあ、京や葵さんが言いたくなるまで待つわ。ー夏も待つでしょ？」

「うん、私も。京や葵さんがちゃんと言えるときまで待つよ」

！？ 追求されない……？ …… 2人とも、ボクたちを疑わないのは甘い。甘すぎる。ボクが敵だとか考えてないのかな？ ……でも、今はその甘さ、いや、優しさが、すごくありがたい。

「うん、ありがとう。いつかは絶対全部話すから…… それまでは待ってて……」

「……ありがとね？ 私、絶対事情とかしつこく訊いてくるものだと思ってたから、すごく嬉しい」

その優しさに対して、少しでも何かしたくて、精一杯のお礼を言う。

「そんなお礼言われることじゃないってっ！ あたしは、当たり前前のごことを言っただけ」

「そんなお礼言われることじゃないよっ！ 私は、当たり前前を言っただけだから」

……やっぱり2人とも、甘すぎだよ……

「えーつと、それでね、京、偽者を作って制御しているのは」「  
敵が作った詳細不明の装置……でしょ？」

正直まだこの嬉しい気持ちに浸りたいけど、少し間を置いて敵I  
Sの話に戻る。……そう、偽者を制御しているのは敵が作った装置。

「そつっ！ さすがは京っ！ よおくわかってるう！」

……ちなみに、詳細不明というのは嘘だ。詳細はわかっている。  
これもまた、例の反乱軍の仕業。あまり信じたくはないけど、ずつ  
とボクの下で働いてくれていた神が今回の実行犯らしい。

（京、あんまり気にしすぎちゃダメだよ？ 京は気付いたんでしょ  
？）

葵がプライベート・チャンネルで話しかけてくる。

（うん…… 大丈夫。ありがとね、葵）

「さて、ボクはとりあえずその装置壊してくるからちよつとここで  
待ってて〜」

そう言ってソードビットを使い、装置のところまで空間跳躍する。

Sideout 〈京〉



Side 一夏

「えーっと、それでね、京、偽者を作って制御しているのは」  
「敵が作った詳細不明の装置……でしょ？」

葵さんが話を戻して、肝心なところを言おうとすると、京が先に言う。

「そうっ！ さすがは京っ！ よおくわかってるう！」

しかも合ってるし。……なんでわかるんだらう？

？ 京が考え事してるみたい。多分悲しいことだと思う。普段はきれいな、どこまでも透き通っているように見える藍色の瞳が今はチラツと見たただけでもわかるほどに悲しい瞳をしている。

「さて、ボクはとりあえずその装置壊してくるからちよっここで待ってて〜」

少し間を置いて京がそう言い残してビットのようなものを使って消える。……！？ って消えた！？

「これがさっき言ってた空間跳躍かな……？」

「……敵はあたしたちが攻撃したりしなければ襲ってきたりはしな

いんでしょ？ なら、京がその装置とやらを壊すまで大人しく待つてればいいんじゃない？」

鈴が言う。

「私もそれでいいと思うよ」

私も鈴の意見に賛成する。

「いや、あのIS、今こっちをロックしたよ」

葵さんがそう言った瞬間、私に向けてビームが放たれる。

「えっ!？」

私は完全に油断していて、急には動けない。 当たるっ！

そう思ったときにはもう葵さんによって上空へと引っ張られていた。……鈴も一緒に。

「ちょっと、放しなさいよっ!！」

窮屈だったのか、鈴が言う。

「あ、ごめん、ずっと腕掴んだままだったね」

葵さんはそう言って鈴の腕を放して、未だに15機の敵ISを見据える。

「ほら、あのIS、やっぱり絶対に攻撃して来ないわけじゃない。

今だってまた攻撃して来てるしね」

葵さんがそう言う間にも敵ISからのビームの雨は止まない。私たち3人はそれを全て避けつつ会話している。

「じゃあどうするのよっ」

鈴が訊く。

「……京が装置を壊すまでアリーナを守りつつ持ちこたえよう。……敵は15機、こちらは3機。逃げるなら止めないよ？」

「……わかった。私は逃げない。ここで戦って家族を守る」みんな

「……わかったわよっ！！ あたしもやるわよっ！！ これで文句ない!？」

葵さんの問い掛けに鈴と一緒に応える。

「そっか……じゃあ行くよっ!?!」

「うんっ!?!」

「わかってるわよっ!?!」

Side out ～一夏～

京&一夏&鈴&葵&セシリアVS無人機(前書き)

今回も複数完成していたので連続投稿です。今回は一応この次までですな。

## 京&一夏&鈴&葵&セシリアVS無人機

Side 〔京〕

「さて、ボクはとりあえずその装置壊してくるからちょっとここで待ってて〜」

そう言ってソードビットを使い、装置のところまで空間跳躍する。

「……ここは…執務室………?」

装置の場所へ空間跳躍すると、天界にあったボクの執務室そっくりな場所に来た。

「どっして………?」

なぜか強盗が入った後のような散らかり具合、いや、強盗が入った後、誰も気付かず何年も放置していたような散らかり具合だ。

「あっ、あれは………」

その散らかった部屋の中で、ボクはあるものを見つける。

「……ボクが創造神になりたてのときの記録………」

中を少し覗いてみると、今回の実行犯、ボクの大切な部下の日記だった。

年 月 日

今日はアリス様に代わる新しい創造神の神崎京様が就任なされた。なにやら少し頼りなさそうにも見える。本当にこの方で大丈夫なのだろうか……？

年 月 x日

今日は新しい創造神、神崎京様が就任されて数日になる。やはりこのお方は少し頼りない面もあるが、徐々に慣れてきたのか全てを包み込むような創造神の面も顔を見せ始めた。今後の成長が楽しみじゃわい。

年 x月 日

今日は新しい創造神である神崎京様が就任されて数ヶ月。最早頼りない面など見ることが出来るのは1ヶ月に1回程度になってしまわれた。もう創造神の顔と言っても過言ではない。

x年 月 日

創造神の神崎京様が就任されて数年、前創造神のアリス様が昔とは比べ物にならないくらいに笑顔を見せられるようになった。これも神崎京様の力なのだろう。

やっぱりボクにはこの神が実行犯なんて信じられない……

「あっ、これが……」

ボクはそのとき、やっと本来の目的である装置を見つけた。  
なぜかここにあるSM系のグッズに紛れて置いてあるのを……

「これは…… どうしると?」

- 1 ・誰か見つけてSMな遊びをする
- 2 ・誰かに見つかってSMな遊びを強要される
- 3 ・見て見ぬ振りをして帰る
- 4 ・特攻
- 5 ・この執務室ごと破壊

…… 1番はあり得ない。2番は正直遠慮したい。3番は戦っている3人に悪いから却下。4番は2番の危険があるからダメ。…… 5番は偽物とは言え、ここは一応思い出の場所だから正直に言つていいやだ。でも……

「…… 5番で行こう」

ボクは執務室ごと消し飛ばすために外に出る。

……外に出ると、やはりあの執務室は偽物なんだなっということがよくわかる。ここは天界ではなく、あくまでも別の世界なのだから。

「久々に派手に行こうか」

そう言うとボクは指を鳴らす。

ズドオオオオオオオオオンツツツ！！！！！！

指を鳴らした直後に凄まじい爆発が起こる。……変なメカが大量に飛び散るが、もちろん煙はドク口の形ではないし、3人乗りの自転車も逃げていない。

「ふう……終わったあ……」

そうやって、京は葵たち3人の元へと向かい始める。

××年 ×月 日

ぐっ……なんだ、これは……まさか！？ ブツツ

あの日記の続きにこんな記録があったのも知らずに

Side out 〈京〉



Side 〔鈴〕

「そっか……じゃあ行くよっ!!」

「うんっ!!」

「わかってるわよっ!!」

勢いでそう言ったのはよかったけど、しばらく経った今でも京が装置を壊せていないのかあたしたちの目の前にいるISは15機のまま変わっていない。

「一夏っ!!」

一夏が敵ISの攻撃に当たりかけた。

「鈴っ!! 後ろっ!!」

一夏があたしに叫ぶ。 後ろ？

「鈴さんっ!!」

後ろには敵IS15機のうち3機がコマのように回ってあたしの方へと迫っていた。 この角度じゃ避けられない!？

「……………?」

あれ…………? 衝撃がない…………? あたし、衝撃を感じることもなく死んだの…………?

「鈴っ!!」

「鈴さんっ!!」

一夏と葵の声が聞こえる。　あたし、死んでない……？

「一夏、葵、敵I Sは……？」

「京が装置を壊すのに成功したみたい。14機の偽者は全部消えたよん」

葵さんが嬉しそうに伝えてくれる。

「そっか……　京にはまた助けられちゃったわね」

十数秒後

「会話中悪いけど、まだ敵I Sは1機残ってるよ。装置を壊したから性能は落ちてるだろうけど」

さっきまで喜んでいた葵さんが会話していたあたしと一夏にそう言う。

「あ、はい」

「わかってるわよ」

敵I Sがビームを放つ　直前にあたしたちの後ろから敵I Sに向けてビームが放たれ、それは敵I Sの腕に命中、その腕は消し飛んだ。



「京っ!!」

葵がボクに気付いたみたいだ。

「3人とも、ありがとう。最後の1機、一緒に倒してくれるかな？」

「もちろん」

「私も手伝うよ!」

「あ、当たり前じゃない!」

葵、一夏、鈴が同時に応える。

「わたくしを忘れてもらっては困りますわ。京さん」

いつの間にか来たセシリアまで……

「ありがとう」

そこからはもう一瞬だった。鈴が衝撃砲、セシリアがスターライ  
トmk?で敵ISを撃ち、それは避けられて、その避けた先で一夏  
が斬りかかり、斬りかかったあとに葵が拘束、最後にボクが敵IS  
の胸にビームサーベルを突き刺して終わった。

Side out (京)

## 揺れる恋心

Side 一夏

神崎……？ 神崎って京の親戚か何かかな……？ いやもしかして

敵IS倒そうか

京の声を聞いてハツとする。どうやら私は思考の海へと出ていたらしい。……京、あとでみっちり聞かせてもらおうからね？

と、言うことがあったのは覚えてる？ 私は覚えてる。

だから私は今、みっちりと話を聞かされたため京の部屋の前に来ている。

「 じゃない。京……」

京の部屋から、知らない女の子の声が聞こえた。

「ごめん、アリス……」

「私ね？ 自分から言い出したくせに、あなたが居ないとすごく寂しくて、心に穴が開いたような、そんな感じだったの。でもね？ 京ががんばって言うてくれたから頑張ろうと思った。けど、あなた、いざとなったときに呼び出したのは私じゃなくて葵。どうい

ことなの？」

「それは」

！？ 京…と、もう1人は…？ 京の恋人…！？

私は、そう考えたときにはもうみっちり話を聞くといい目的も忘れて全力で走っていた……

Side out 〱一夏〱

Side 〱京〱

あの無人機との戦いが終わって数時間、いろいろあって寮に帰るのが遅くなってしまった。

……部屋に入り、奥へ進むとかなり見覚えのある女の子が立っているのが見える。

「……酷いじゃない。京……」

ア…リス……？

「ごめん、アリス……」

「私ね？ 自分から言い出したくせに」

ボクは知っていた。

あなたが居ないとすごく寂しくて、心に穴が開いたような、そんな感じだったの。

アリスが寂しがっていることを。

でもね？ 京ががんばって言うてくれたから頑張ろうと思っただ。

だからボクはアリスにがんばれって言った。

けど、あなた、いざとなったときに呼び出したのは私じゃなくて葵。どうということなの？」

けど、それはボクの自己満足だったのかもしれない。でも

「それは…… ボクはアリスに「がんばれ」って言った。そのボクの都合でがんばっているアリスを呼び出してしまふことは出来なかった。……「がんばれ」って言った本人が「負ける」って言うのと同じだと思ったから……」

アリスはボクのことを聞いて少し考える仕草をする。

「そっか…… やっぱ結局は自分のためじゃなくて他人のために動くんだ…… 京は」

「……ボクは親しい者のためにしか動かないよ」

「京……」

アリスが目を瞑って顔を近づけてくる。

「アリス……」

そしてボクはそれに応えて自分からも顔を近づけて

ボタンッ！

いきなりボクの部屋の扉が開く。

「きょ……う……？」

「鈴……」

いきなり開いた扉の先には、瞳に涙を溜めた鈴がいた。

「京、この子は？」

アリスが訊いてくる。

「この間知り合った2組の代表。中国の代表候補生だよ」

「そう言う意味で訊いたんじゃないかって……」

アリアが言う。……じゃあどっいう意味？

「京の……ばかああああ！……！」



そう言っつて鈴は走り去ってしまった。 大粒の涙を零しながら。

「京、どういふことか、聞かせてもらってもいい？」

アリスが言う。……この顔は絶対聞き出さないと諦めない顔だ……

Side out 〔京〕

Side 〔鈴〕

今日、戦闘中に京が呼び出していきなり現れた神崎葵つて子のこと  
とが少し気になって、あたしは京に詳しく訊くために京の部屋へと  
向かっている。

京の部屋がある階の廊下に着いたら、京の部屋の扉の前に一夏を  
見つけた。声をかけようと思ったら、一夏はいきなりあたしとは反  
対の方向へと走り去って行った。

(どうしたんだろう……?)

京の部屋の前に着いた。すると、京と、もう一人、知らない女の  
子の話し声が聞こえる。

「そっか…… やっぱ結局は自分のためじゃなくて他人のために  
動くんだ…… 京は」

「……ボクは親しい者のためにしか動かないよ」

「京……」

女の子が妙に可愛い声で京の名前を呼ぶ。

「アリス……」

そして京も　！？　この状況ってまさか！？

バタンツ！

思わず京の部屋の扉を力一杯開けてしまった。……すると、部屋の奥には今にも唇が触れそうな位置で止まった京と女の子が居た。

京の…恋人！？

「きょ……う……？」

「鈴……」

「京、この子は？」

その女の子が京に訊く。　この反応は間違いなく恋人……

「この間知り合った2組の代表。中国の代表候補生だよ」

京が応える。　京にとってあたしは“中国の代表候補生”でし  
かなかつたのかな……？

その考えにたどり着いた瞬間、あたしは酷い喪失感……というのが

正しいのかわからないけど、ただただ悲しかった。あたしにとっての京の存在の大きさと、京にとってのあたしの大きさが全く違った。そう、思い知らされた。

「京の……ばかああああ！！！」

このときのあたしは弱くて、ただただ悲しい、あの感覚に耐えられずに、全てを京の所為にして逃げ出すことしか出来なかった……

S i d e o u t 　〈鈴〉

## 揺れる恋心（後書き）

はい、今回はここまでです。最後まで見ていただき、ありがとうございました。

次回はまた日曜日になります。ほぼ確実に次で一作目の方に追いつきますので、次回は一作目の方も同時に更新したいと思えます。  
（一作目の方で次話が完成していれば……）

新しいスタートと天界の異変（前書き）

今回は一気に話が進みます。

## 新しいスタートと天界の異変

Side (葵)

私は今から伝説の英雄、神城はるかちゃんにわがままなお願いをしに行く。 はるかちゃんは今回の事件には全く無関係なのに……

(ここは……？ 僕はなにを……？)

はるかちゃんの意識への接続が成功した。

(あつ、気が付いた？ ここは神のみが存在できる特殊な空間。“現”創造神の神崎京ちゃんが創造したんだよん。キミ、朝弱いでしょ？ そんなキミが起きてすぐに普段やらない高機動戦闘したのが原因だね)

(僕はそんな理由で倒れたのか…… ん？ 神のみが存在できる……？ “現”創造神……？)

はるかちゃんが私の言ったことへの当然の疑問を口にする。

意識だけの会話だから実際に口を開いたわけじゃないんだけど。

(うん、ここは神のみが存在できる。つまり、キミは昔、神だったんだよ。でね、“現”創造神とは、その名の通り現在の創造神、神崎京ちゃんのこと。今は神崎京ちゃんが事情があっていないから“前”創造神の神崎アリスちゃんが代理だけどねんっ)

(僕が……神？)

あれ？ 思つたより驚かないなあ。

（そう。キミは元々神だったんだよ。私の盟友であり、親友だったけどね、数億年前、神の中で大規模な反乱があつてね。そのときに「全てを幸せに」と言つて味方全員を敵の大規模攻撃から庇つて死んだんだよ……）

（そんなことが…… 僕がここに呼ばれた理由は？）

…… やつぱり、本題に入らないとだよね……

（…… 最近、再び反乱軍が組織されたらしいんだよ。もしそつちの世界になにかあれば出来る限りで対処してほしいかな。…… 今はあのときのお前とは関係ないことはわかつてる。だが、それも言つていられない事態なのだ。頼れるものは極一部の最大限の信頼が置ける神のみ。そんな状況では他の神に頼むことは出来ん。でもお前なら、あのときとは関係ないがお前なら信頼が置ける。だから頼む。勝手な都合だが、もうお前しかいないのだ……）

（そうですか…… わかりました。引き受けます。僕も、「全てを幸せに」したいから……）

私は、珍しく昔の、今となつては軽く黒歴史と化しているしゃべり方で話す。 ごめんね。はるかちゃん……

S i d e o u t 〈 葵 〉

Side 〈京〉

「ふうん…… そういつことね」

結局あのと、アリスに根掘り葉掘り全てを聞き出された。

「京、あなたこれから女の子を助けるのは禁止ね？……とまでは言わないけど、責任はしっかり取りなさい」

「責任？」

「はあ、どうしてあなたはそう言うことに関してはいいつもそんなに鈍感でいられるの？ それくらい自分で考えなさい」

「はい……」

こういつときのアリスには逆らわない。昔、そこから大喧嘩になって、100年ほど口を聞いてくれなかったこともある。そのときの苦痛はもう二度と体験したくない。

「おー、アリスちゃんじゃないかあ。いつの間にかこっちに来てたの？」

そうやって現れたのは、神崎葵その人。

「葵！？」

アリスが反射的に構える。



「そんな警戒しないで。今回は珍しくほんのちよっぴり真面目な話  
しに来ただけだから」

「真面目な話？」

ボクが聞き返す。

「そ。真面目な話。……ちよつと前にさ、私が“ある人”を転生さ  
せたのは知ってるよね？」

「えーっと、確かボクが創造神になる前に起きた反乱で仲間を庇っ  
て亡くなつた英雄……だつたっけ？」

ボクが創造神になる前、大規模な反乱があつた。その反乱の一番  
の原因は、かなり上位の神々の暴走だつた。彼らは、自分より下の  
神を操り、私欲のために利用した。その末、創造神及びに最高神へ  
の反乱となり、天界では内戦が始まつた。神は決して万能では  
なく、永遠の時を生きるとはいえ、基本は人間と同じ生命体だ。生  
まれることもあれば、死ぬこともある。

「うん。私としては珍しく昔のスタイルでやつたんだけど、最近ま  
た反乱起きてるでしょ？もしかしたら向こうの世界の方にも干渉  
されるかもしれないから」

「今回もまたその英雄のいる世界で起きたことへの対処を依頼  
した……かな？」

葵の言葉を途中で遮り、ボクが続ける。その英雄の転生した  
世界もこのことと同じくISの世界に分類される。でも、厳密には違う。

この世界と英雄の世界はいわゆる『パラレルワールド』というもの。つまり、大まかな括りでは同じ世界に分類されるが、厳密にはどこかが違う。似たような例を挙げるなら、動物の『ライオン』と『トラ』が似たような関係だ。ライオンもトラも大まかな括りでは同じネコ科に分類されるが、厳密には『ライオン』と、『トラ』という全く別の動物だ。

そのように、似ていてもどこか違う。大まかな括りではISの世界でも厳密には全く別の世界。そんな関係だ。

「正確には出来れば対処、出来なければ連絡、だけどね」

そう言った葵の表情は少し暗い。

「事後報告なのが少し残念だけど、わかった」

「ありがとう。京」

「そんなお礼を言われることじゃないよ。これは」

このときのボクは気付いていなかった。大変な事件が起きていることを……

Side out 〈京〉

Side 〈一夏〉

「 どういうことなの？ 」

「 それは 」

！？ 京…と、もう1人は…？ 京の恋人…！？

私は、そう考えたときにはもうみっちり話を聞くといい目的も忘れて全力で走っていた……

全力で走り回ったあと、結局疲れて近くにあった公園のブランコに座っている。

「 はあ、どうして私、こんなに弱いのかなあ…… 」

昔なら、驚きはしたけど、ここまで大きなショックは受けなかったはずだ。

「 やっぱ私、本気で京が好きだったんだ…… 」

そこまで考えたとき、こちらへと向かう鈴の姿が見えた。

「 ……鈴？ 」

「 ……一夏？ 」

数分後

「 そっか…… 鈴も…… 」

鈴も、私が走り去った直後に京の部屋に行った。そこで、キ  
ス寸前のところで止まった2人を見て、自分の中での京の大きさと、  
京の中での自分の大きさの違いに気付いてしまったらしい。

「あたしたち2人とも、やっぱり京のことが本気で好きなのよね…  
…」

「でも、京には恋人がいる」

「それでも、やっぱり好き。どうしても、諦められない」

「……じゃあどうする？」

「……あたしが、京の一番になる。あたしを、好きにさせる！」

鈴が言う。

「うん。私も、そう思う。良くも悪くも、私たちは似てるみた  
いだね」

「じゃあ、あたしたち、同盟組まない？ 京争奪戦に“2人で”勝  
利するために」

鈴が提案してくる。それに対する私の答えは

「もちろん。これからもよろしくね。鈴」

「こちらこそ、よろしく。一夏」

こうして、私たちの恋は再スタートを切った。

Side out 一夏

Side 京の部下

！？ 天界の最深部にある京様の執務室で仕事をしているとき、いきなり周りの者たちの気配が変わる。

「……シネ」

そうやっていきなり攻撃された。

「！？ 何をしています！？ 目を覚まさない！！」

「……シネ、シネ、シネ、シネ、シネ」

周りにいる全ての神々から攻撃が来る。

これは……一体何がどうなっているんです！？

「スベテハ、ソウゾウシン“ソプラノ”サマノタメニ……」

創造神……？ “ソプラノ”様！？

「これは、一刻も早く京様に報告しなければ……」

Side out 〔京の部下〕

Side 〔京〕

夜、結局このままこちらにいることにした2人は、また後日IS学園に編入するとかで今日は別の場所に泊まることにしたらしい。……今天界を留守にして大丈夫なのかな？

そろそろ寝ようかと思った頃、ドンドン！という扉を叩く音が聞こえた。お客さんかな？ ……こんな夜中に。

眠気が一気に吹っ飛んだため、軽く殺意を覚えながらドアを開けると、そこには箒が立っていた。

「きよ、京……」

「ん？」

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……」

それがどうしたんだろう……？

「わ、私が優勝したら」

箒はなぜか恥ずかしそうに顔を赤く染めて目を逸らして言う。



## 新しいスタートと天界の異変（後書き）

前回衝撃を受けた一夏ちゃんと鈴ちゃんでしたが、2人で同盟を組みました。これは一応少し前から決めていたことで、意図的にこうなるようにストーリーを進めてきました。……まあ、基本はキャラクターが勝手に動くので、こんな風に予定通りに出来るのは私の中で本当にそれはこんな風になる。と完全に納得している分のみです。普段はこんなに上手くはいきません（笑）

さて、次回ですが、こちらは今流れに乗ってすらすらと書いているので一作目を書いている間にもう少しオリジナルストーリーが入ります。（京の創造神という立場上どうしても一作目よりオリジナルストーリーが長くなりますので。。。）ですので、こちらの方はいつも通り次は木曜日に更新の予定です。

6/26 投稿後読み返して見ると書こうと思って結局書いていなかった箇所があったので少し加筆しました。



新たな出会い……？（前書き）

今回変更したタイトル『IS Infinite・Stratos  
Opening the fate of pretty  
flowers』はセシリア仕様（英語）です。一応英語は自分で訳しても出来ないことはないのですが、セシリア仕様だけ翻訳サイトを使わないのはどうかと思って翻訳サイトを利用しました。（  
筹ちゃん仕様の古文モードも翻訳サイト産です。現代文 古文翻訳  
サイトがあつたことにびっくりしました。。。

新たな出会い……？

Side 〔京〕

今は6月の頭、日曜日。ボクは久々に駅前のショッピングモールに出かけていた。何かを買うわけではなく、いわゆるウィンドウショッピングってやつだ。

「キミ可愛いね〜。よかつたら一緒にお茶しない？」

「あっちにいいお店あるからさ」

ん？ 何かベタなセリフでナンパしてるチャラ男が2人。

「え、あ、いえ、結構です」

女の子は普通に断る。

「ええ〜、いいじゃんいいじゃん。ほら、むこう行こうよ」

「や、止めてくださいっ！！」

男が女の子の手首を掴む。

「お、キミも可愛いね〜、俺らとお茶行こうよ」

男たちはボクの方にも来て、さっきの女の子と同じように腕を掴もうとする。

「ボクに触れるな」

バシッ！！

その音と共に掴みにかかってきた男を投げ飛ばして、そのまま女の子の手首を掴んでいた男も腕を潰してから投げ飛ばす。

「……え？」

女の子は啞然としている。

「んなっ！？ テメエ、何しやがった！？」

最初に投げ飛ばした方の男が訊いてくる。 もう1人は腕を潰したときの激痛で気絶したらしい。

「キミ、大丈夫？」

女の子に小声で訊く。

「ふえ？ あ、はひっ。だ、大丈夫です」

女の子の顔が赤い。……どうしたんだろう？

「それよりキミたち、女の子の手首を掴んで無理矢理連れて行くこととするのは感心しないなあ」

でもね、今はそんなことよりも気になることが1つ。

「まあ、そんなことよりも、ボクを見て女の子だと思った理由を聞かせてくれるかな？」

ボクは男の子だよ？

生き残ったほうの男が殴りかかってくる。

「あ、あぶっ」

女の子が言い終わる前に殴りかかってきた男の鳩尾にパンチを入れてそのまま後ろの壁に叩きつけて決着が着く。

「そのキミ、大丈夫だった？」

「え？ あ、は、はひっ！ だ、ただ大丈夫です。た、助けていただき、ありがとうございました」

ボクが訊くと、丁寧に返してくれる。

「それより、今はここを離れようか。今ので少し騒ぎになってるから」

「は、はい」

そう言って女の子はボクの後ろを付いてきてくれる。

「あ、あの、よければ、なんですけど…… その喫茶店に入りませんか？」

Side out 〔京〕

Side 〔蘭〕

私は今、男の人？と2人で喫茶店にいる。

その男の人？は、私がチャラ男に絡まれているところを助けてくれた。

あの、投げ飛ばした瞬間の姿……カツコよかったなあ……

そう思うとつい、ここで別れて会えなくなるのがいやになって喫茶店に誘ってしまった。 コーヒーと紅茶だけだけれど。

なぜか今もずっとドキドキしてて、なんか恥ずかしくてそこらじゆつを駆け回りたいような、そんな気持ちに支配されている。

「わ、私は五反田蘭といいます。 蘭と呼んでください。 よろしくお願ひします」

私はとりあえず自己紹介をする。

「ボクは神崎京。 一応高校生かな。 こちらこそよろしくね。 蘭」

ら、蘭って呼び捨てで呼ばれた……

今、私の脳内ではさっきの呼び捨てにされたときのセリフがル―

プしている。

「ところで、蘭は高校生？」

京さんの声で現実に引き戻される。

「あ、いえ、今は中三です。来年から高校生ですね。京さんはどちらの高校に？」

「えーっと、あんまり大声では言いたくないんだけど……」

京さんが近付いてきて、小声で

「IS学園」

そう言った。

「え！？ 全寮制で、しかも女の子しか入れない、あのIS学園ですか！？」

私は小声で、且興味があることを隠さない口調で訊き返す。

「うん、その全寮制で、しかも女の子しか入れないIS学園。ボクは特例だね」

ってことは京さんの周りには女の子がいっぱい……

「京さん、私、来年IS学園を受験します」

自然に、口から出た言葉だった。

Side out 〔蘭〕

Side 〔京〕

「京さん、私、来年IS学園を受験します」

蘭がそう言う。

「えっ!？」

「私、IS簡易適正試験で判定Aなんです」

そう言って「IS簡易適正試験 判定A」と書かれた紙を取り出して見せる蘭。

「なので、合格したら京さんが先輩としていろいろ指導してください!」

「ああ、うん。いいよ」

二つ返事でおーけーする。 蘭は小さくガッツポーズを取る。

「ところで、蘭はまだ帰らなくて大丈夫?」

昼ごろから出かけてただけど、いつの間にか夕日のきれいな夕

方になっていた。

「あ、もうこんな時間……」

「よかつたら送って行こうか？」

さっきみたいなのに絡まれたら危ないしね。

「あ、はい！ お願いします！！」

蘭は気合の入った声で答える。 自分から言い出しておいて何  
だけど、さっき会ったばかりのボクをそんなに信頼してしまってい  
いのだろうか。。。

「とりあえず会計行こうか」

そう言っただけは蘭の分まで支払う。

「そ、そんな、悪いですよ、京さん……」

「いやいや、未来の後輩のためにはこれくらい大丈夫だって」

ボクはそう言う。もちろん嘘ではない。蘭はもうボクの中では  
“親しい者”の枠に入っている。

「じゃあ、行きましようか」

蘭が先導して歩き出すと、ボクも遅れないように一緒に歩く。



数十分後

「あ、ここです」

入り口に「五反田食堂」と書かれた建物の前に着いた。ここが蘭の家らしい。

「あの〜、京さん、メアド、交換しませんか？」

ボクが帰ろうとすると蘭が言う。

「ああ、そうだね。先輩として指導とか言ってるのに、連絡取れなかったら意味ないか」

そう言ってメアド交換のために携帯 の、代わりにISを出す。

「？ その指輪は？」

蘭が不思議そうに訊いてくる。

「これはボクの専用IS『プリムラ・ポリアンサ』の待機形態だよ。これが携帯の代わり」

「へえ〜、便利ですね〜」

蘭が言い終わって間もなくメアド交換が完了する。

「じゃあ、そろそろ帰るね」

「あ、はい。今日はありがとうございました！」

蘭の声を背にIS学園の寮へと向かう。

「……きょ……う……さま……」

いきなり目の前に見覚えのある女神が現れた。  
今降りてきたらしい。

「て……ん……かい……が……」

「!?!? 天界がどうした!?!」

ここまで言って女神、最高神ゼウス『神崎葵』の“妹”の知恵の女神アテナ『神崎芽衣』は気を失った。

「今、天界で何が……」

Side out 〈京〉

## 新たな出会い……？（後書き）

……前回予告したオリジナルストーリー、最後の最後まで  
すね。。。

まあ、殆どオリジナルといえばオリジナルですけど。

箒より前に京が引越した設定なので、弾くんと面識がないです。  
その上でどうやってスムーズに原作ストーリーに近付けようかと思  
ったら、なぜか蘭が絡まれているところで京にまでとばっちりがき  
て、それを京が跳ね除けて、ついでに助けて知り合うという方法に  
なりました。

よく見たら正当防衛になってないとか、一部セリフが厨二だとか  
突っ込まないでください><

芽衣が葵の妹なのは、葵の見た目と性格が完全に親には見えない  
からです。どちらかというと某軽音楽系の人気アニメの主人公とそ  
の妹的な関係の方が近いと感じました。

今回はまた日曜日の更新になります。

## 芽衣の作戦（前書き）

今回はいつもより少し文字数が多いです。（というかここ最近ずっと多いです。）

## 芽衣の作戦

Side 〔京〕

とりあえず芽衣はボクの部屋で寝かせている。正直あの続きが聞きたくて仕方がないけど、そんなことを言っても仕方がない。

「京……もし天界で何かあったのなら私の責任……よね？」

アリスが訊く。

「いや、ボクが葵を呼んだこと、それによってアリスが降りてくることに気付かなかったボクの責任だ。こんなことでは創造神なんて仕事は勤まらないね……」

「そんなことない！ 京は今まで創造神としての仕事、1つも失敗してないでしょ？ もし今回のことが失敗だったとしても、それだけで創造神失格なんてことにはならない。神族だって生きてるんだから失敗もするわよ」

「でもそのトップ…… 創造神という仕事はそもそも失敗は許されない。1つの小さなミスで世界を滅ぼすことだってある。……今回天界で何かあれば、ボクは力を全て葵に預けてその葵に創造神の座を譲るよ……」

アリスの励ましはありがたい。でも、やっぱり創造神という仕事をやる以上は失敗は許されない。

「私、もしそんなことになっても創造神には就かないよ。ボクは“創造神の京の下で働く”のが生きがいだから…… 自分が創造神になるなんて絶対いやだよ」

葵……

「……………んんっ……………んん？」

芽衣が起きた。

「おはよう。芽衣」

「お、おはようございます。京様……………！？ 京様！！ 大変です！！ 天界が！！」

芽衣がガバツと起き上がって急に大声を出す。

「ちよつと待った芽衣！！ まずは声を抑えて」

「は、はい…………… じゃなくてですね！ 天界でクーデターが起きたんです！！」

！？

「クーデター！？ 首謀者は！？」

首謀者を訊くと、なぜか苦虫を噛み潰したような顔になる芽衣。

「……………アリス様のさらに前の創造神、ソプラノ様です」

「!? ソプラノ様が!? どうしてそんなことを!？」

アリスが取り乱しながら訊く。

「それはわかりません。ですが、私が執務室わたくしで仕事をしているときに襲ってきた周囲の上位神たちが『全ては創造神ソプラノ様のために』と呟いていたのを確認しました」

「でもそれだと、ソプラノ様の親衛隊を気取った神だという可能性もあるんじゃない?」

葵が意見を出す。

「ええ。それだけならそう捉えてもよかったです。執務室にいる神は全て上位神ですよね?」

「うん、そうだね。ごく一部を除いて全て上位神で構成してる」

「その全ての神が何者かに操られていたようです。……おそらく、創造神クラスの力を持った神かと」

場の空気が一瞬凍りついた。 ような気がした。

「そして創造神クラスの力を持った神は、現在は京様、アリス様、そしてソプラノ様のみです」

「ああ、そう言うことが……」

犯人はボクではない。かと言って、アリスもあり得ない。あとはソプラノさんだけだが、あの方がそんなことをするとは思えない。

でも、創造神でなければ上位神を複数一度に操ることはもちろん、単体でもよほど弱っていない限りは不可能。

「でも…… あの方がそんなの……」

アリスが呟く。 アリスにとっては、直接創造神の仕事を引き継いだ先代だ。やっぱり受け入れがたいと思う。アリスよりソプラノさんとの付き合いが短いボクでも受け入れがたいから、やっぱりアリスはもつと……

ちなみに、ボクとソプラノさんは面識がある。昔、ボクが創造神になって数ヶ月の頃に、普段行かないところに行ってみようと思っ  
て、アリスに内緒で冒険気分で出かけたことがある。

結局途中で道に迷って、でも冒険なんだから細かくいろいろ書き記してある地図を見るのもなんだか情けなくて、どンドンドツポに嵌っていった。そのときに助けてくれたのがソプラノさんだ。

彼女は背が高く、おおらかで、心の底から優しく、創造神の座に就いて数ヶ月のボクなんていとも簡単に包み込んでしまう極めて強い“創造神のオーラ”、その全てが揃っているような方だった。

ボクは彼女と話していると、いつの間にかお姉ちゃん、というかお母さん、というか、そんな“家族”と話していると錯覚してしま  
うくらいに大好きだ。

「とりあえず、首謀者の件はまた確定情報が得られるまで保留……  
でいいかな？」

この場にいるボク以外の3人に訊く。



「うん」

「ええ」

「……わかったわ」

葵、芽衣、アリスの順で応えてくれた。

「で、重要なことを聞き忘れたんだけど、クーデターするとき執務室まで影響があつたつてことは天界の中枢は全て反乱軍の手に？」

「………はい。私も最後まで見ていたわけではないので、一概にそうだとは言えませんが、あの勢いならおそらく天界の中枢は全て反乱軍の手に渡つたと考えるのが妥当かと」

「そうか………」

なら、今回の件は全てボクが終わらせる。何をしてでも。そして全てが終わつたとき、本気で創造神を“辞める”ことも考えていこう。

「京様………」

芽衣が心配そうに見てくる。

「京、あなた、自分がどうなっても今回の件は自分の手で終わらせるとか考えてないでしょうね？」

気持ちを切り替えたアリスが訊いてくる。

「………やっぱりアリスには全てお見通しか………」

「当たり前よ。何年の付き合いだと思ってるのよ、あなたは」

「……数万ね」

「黙りなさい」

「……はい」

最近、歳の話になるといつもこうなる。      やっぱり神でも歳の話は不味いみたい。

「で、具体的にどんなことを考えていたのか、教えなさい」

アリスが訊いてくる。……容赦ないなあ。

「……ボクがこの『IS』の世界全体に例え天界からであっても干渉できない障壁を張る。その上でボクがおそらく首謀者が居ると思われる天界の中枢に進入、鎮圧する」

この世界だけでも天界からの干渉が出来ないようにしないと、何をされるかわからない。

「!? 無茶よ!! あの時壁は例え創造神であっても1人では神力の消費が激しすぎるのよ!？」

「それじゃあ身体や存在を維持するための神力まで消費してしまうじゃないか?!」

「……障壁自体成功するか怪しい上に、天界の中枢に居ると思われる首謀者を倒して鎮圧するとなると、最終的に死ぬことになります

よ。京様」

ボクが言ったことはアリスたち3人によって思いっきり批判されてしまった。

「うん、わかってる。昔ボクが初めてその障壁を張ったときはたったの執務室1つ分だったのに神力がほぼ底を突いたしね」

まあ、そのときにその障壁を張った理由はアリスとの喧嘩なんだけどね。。。

「それなら」

「でも、ボクの神力はあの頃とは最早比べ物にならないくらいに向上してる。おそらく、ボクが死んだとしても成功するはずだ」

「京様、ですが、成功したところでそれを維持するために神力を送り続ける役割が必要です。そして、障壁を張った時点で京様が死ぬとなると、誰が天界の中枢を鎮圧するんです？」

「あっ……」

芽衣の鋭い突っ込みがボクを襲う。

「もちろんその点もじっくりと考えられた上での発言ですよね？」

「いや、その……」

「まさか考えていないなんてことはありませんよね？ 創造神とも在るうお方が」

……降参。芽衣ちゃんには敵わない。さすがは知恵の女神。

今回のボクの考えが足りなかったただけなんだけど。っていうかなぜか途中から鎮圧のことが頭から抜け落ちてた。。。

「すみません。全く考えてなかったです」

正直に言う。

「それなら、京様が消えてでも障壁を張るという案は却下です。それよりももっと相応しい案があります」

「……相応しい案?」「」

ボク、アリス、葵の3人が同時に訊く。

「はい。ここにいる4人の神力を集めて例の障壁を展開、維持します。しかし鎮圧に関しては、まだ情報もあまりありませんし、例の障壁を張るとなると4人の神力も大幅に低下します。……これについては時機を見ての行動が最善です」

「時機を見ての鎮圧には賛成だけど、障壁の方は4人の膨大な神力を1人が制御しなければいけないことになるわよね? それは実質不可能じゃない?」

アリスが問題点を指摘する。

「いえ、問題ありません。神力の制御は全て私わたくしにお任せください。必ず制御して見せます」

芽衣が言う。

実は、芽衣が今ここまで自信満々なのには理由

がある。

「芽衣は神力の制御だけなら創造神の遙か上に行く。問題があるとすれば、芽衣の身体や存在が膨大すぎる神力によって崩壊しないかな」

「それも問題ありません。京様、アリス様、葵姉さん、私の4人で膨大な神力を出しますが、京様のみ、それに加えて私の身体わたくしと存在を強化してください」

……身体はともかく、存在の強化は創造神でなければできないことではない。普通の上位神までは、世界の管理は出来ても、生み出したり、自身の管理する世界を意図的に強化することは不可能。言い換えると、上位神までの神は元々ある存在をある程度弄ることは出来ても、その存在自身が自分で成長しない限り、強化することは不可能で、存在自体を生み出すことも不可能。生み出したり、意図して強化したりは創造神以外には出来ることではない。

つまりは、現創造神であるボクか、前創造神であるアリスのどちらかにしか出来ない仕事だ。そしてその仕事は現創造神のボクがやるのがベスト。

「でもそれは京1人が無理することになるわよね？」

「いくら京でもそんなことしたら神力がすっからかんになるんじゃない？」

アリスと葵が言う。

「その問題も解決済みです。京様には、不本意ですが一時的に『人

間』になっただけです。それなら、神族に比べ必要な力がかかり低いです。……とはいえ、存在自体が創造神ですから、本当に人間になるのではなく、人間並みまで省エネ化をするだけです。まあ、身体能力や、怪我をしたときなどに再生したりする力にも上限がかなり低いところまでできてしまいましたが、それでも本物の人間よりは遙かに上です」

「そうか……じゃあそれで行こう。アリスと葵もそれでいいかな？」

ボクが訊くと、

「はあ、やっぱりあなたはそういう選択をするのね。……まあ、最初からわかってたことだからそれで構わないわよ」

「芽衣の案だけど、京らしい選択だね。私は賛成」

と、応えてくれた。

「決まりましたね。では、詳しい内容ですが」

こうして、ボクの考えは芽衣の作戦によって“みんなで”という条件付きで実行に移されることとなった。

Side out (京)

## 芽衣の作戦（後書き）

今回から数話後にかけて京くんが弱体化します。理由は正直なところ創造神だと原作キャラが目立たなくなる上にすぐに決着が着いてしまったためです。ですが、アリスちゃんのさらに先代の創造神まで出てきましたから、オリジナルストーリーの方では京くんは弱い部類に入ることになります。……例の障壁のため直接手を出すことは出来ないので問題ありませんが。（“直接”手を出すことが出来ないだけで、裏技はあります）

弱体化後の京くんの強さは、原作キャラで言うところと千冬さんと同等くらいです。もちろん状況によって変わりますが、弱体化してもなおチートですね。

さて、次回なんですが、三作目（一作目の改編版だったもの）も書き始めたため、いつも通りに木曜日に更新できるか怪しいです。しばらくは様子見ですね。

あ、それとですね。。。

私は普段本なんかのあとがきはあまり見ないんですけど、今日たまたま原作第2巻のあとがきを見てみたら原作の方の初期段階の企画が『美少年主人公女装モノ』だったことを初めて知りました。正直びっくりです。。。

一夏の陰謀……？

あとがきにお知らせその2を追記しました(前書き)

今回変えたタイトル『IS Unendlich・Strato  
s } Err?ffnung das Schicksal der  
schenen Blumen』は、ラウラちゃん仕様(ドイ  
ツ語)です。

今回は少し短めで、しかもほぼ原作通りの展開・セリフです。  
…  
…原作通りのところを自分風を書くのはニガテです。。。  
…



「一夏の陰謀……？」

あとがきにお知らせその2を追記しました

Side 〔京〕

「じゃあ、例の作戦は来週の日曜日に実行するわよ。京はそれまで神力の無駄遣いはダメよ？」

そう言っただけでアリス達3人は帰っていった。あ、そうそう、アリスと葵の2人、明日転入してくるらしい。さすがに2人と同じクラスということはないと思うけど、やっぱり同じクラスだといいなあ。

「京、居る？」

「一夏？」

ガチャッ

「あ、あのね、京……一緒に夕飯行かない？」

ドアを開けた瞬間、“鈴に”そう言われた。

「べ、別に私が一緒に行きたかったわけじゃないわよ？ い、一夏と一緒に誘おうって言うから仕方なく」

「はいはい、照れ隠しご苦労様。それより京、私たちと一緒に夕飯行こうよ」

「あ、ああ、うん。一緒に行こうか」

一夏と鈴とボクの3人で食堂へと向かう。その途中で

「お。神崎くん。やっほー」

「ええっ!?! か、神崎くん!?!」

ダボダボのパジャマを着ていて、ずり落ちる大きなナイトキャップを袖の余った手で直してよろめいているのが印象的なほほんさん(仮)がボクを見つけて手をぶんぶんと振っている。

「やー、かりむー」

「その愛称、定着したのか……」

「そりゃそうなのだよー。それよりさあ、私とかなりんと一緒に夕飯しようよ〜」

先ほどのほほんさんがボクを呼ぶ際に使った愛称は、実は初対面のときからそう呼ばれていた。っていつかこの子はどうして毎回こんなに着してくるんだろう? 恥ずかしくないのかな……? まあ、個人的には子犬みたいで可愛いと思うけど。

「残念、京は私たちと夕飯するんだよ」

「わー、おりむーとりんりんだー」

「そ、その呼び方はやめてよ!」

りんりんと呼ばれた鈴は声を荒げる。……何かいやなことでもあったのだろうか。いや、あまり深く考えるのはよそう。

「まあ、鈴。落ち着いて。この子たちは丁重にお断りするから」

「え、ええ……」

「ところで、そのかなりんって子はどこかに行っちゃったよ？」

「おわー。ほんとだーいないー」

ラフな格好を見られたのが恥ずかしかったのか、自分の腕で体を抱くように隠しながら廊下の先へと消えていった。ふう、一応ボクも男として見てくれてよかった……

「あー……待ってー」

そう言っただけのほほんさんもぺたぺたとどこかへと走っていく。……めっちゃくちゃ遅い。

「……丁重にお断りする必要もなかったね。とりあえず、食堂行こうか」

一夏がそう言うと、再びボクたち3人は食堂へ向けて歩き出した。

## 食堂

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの神崎くんの話よ」

「いい話？ 悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？ 絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？ 女の子だけの話なんだから。実はね、来月の学年別トーナメントで」

いつも通り食堂は騒がしい。それに今日はなぜか1つの机にかなりの人数で使って盛り上がっているとところもあるみたいだし。

「えええっ！？ そ、それ、マジで！？」

「マジで！」

「うそー！ きゃー、どうしようー！」

なんなんだろう、この異様な盛り上がり方は。

「ねえ、京……」

「ん？」

鈴が箸を置いて話しかけてくる。よく見ると直前に一夏が鈴に何か耳打ちしてたようだ。

「1つの間の……ことなんだけど……」

「うん」

「気にしないでね？ あたし、大丈夫だから。これまで通り、よろしくね。京」

……本人が気にするなって言ってることをいつまでも気にしてても仕方ない…よね？

「うん。わかった。今まで通り、これからもよろしく。鈴」

「よかったね、鈴。理由とか詳しく聞かれずにこれまで通り接してくれるって言ってくれて。実は鈴、すごく嬉しいんだよね？」

一夏が最初は真面目に、最後はニヤニヤしながら言う。

「そ、そそそんなことないわよ！ あ、あたしはちつとも嬉しくなれないんだからね！ 京、勘違いしないでよ！」

鈴が顔を真っ赤にしてこちらに向かって叫ぶように言い放つ。

「別にボクは変な勘違いはしてないよ。安心して？」

「う、うん……」

ボクがそう言つと小さなため息と共に少し俯いてしまう鈴。  
どうしたんだろう？

「鈴の可愛さを引き立てようとしたんだけどなあ…… 失敗失敗」

一夏がそう呟いた。 どういう意味？

「さて、とりあえず食事再開するよ」

一夏がパンパンと手を叩きながら言い、その後鈴に耳打ちする。

「そうよね、まだこれからよね……」

鈴が呟く。何か失敗したのだろうか。何にしる立ち直ったみたいだし、放っておくのが一番だよな。

「それに、食事が長引いてこれ以上遅い時間になるのもあれだしね……うわ、いつの間にこんな時間に!？」

ボクが急いで食べ終わって食器を片付けに行くと途中で、

「あ　っ！　神崎くんだ!」

「えっ、うそ!？　どこ!？」

「ねえねえ、あの噂ってほんと　もがっ!」

ボクたちが食堂に来たときからずっと盛り上がっていた一団の中でボクの存在に気付いた女子が雪崩れ込んでくる。……噂って何？

「い、いや、なんでもないの。なんでもないのよ。あははは……」

「　　バカ!　秘密って言ったでしょうが!」

「いや、でも本人だし……」

「噂って?」

「う、うん!？　なんのことかな!？」

「ひ、人の噂も365日って言うよね!」

1年は長いよ。1年は。

「な、何言ってるのよ!!!」は!　49日だってば!」

それも違うよ。　　といつかさ、

「何か隠してるでしょ？」

「そんなことっ」

「あるわけっ」

「ないよ!？」

そう言ったまま風のように去って行ってしまった。……とりあえず食器片付けないと。

「京、さっきの人たちは？」

一夏が訊いてくる。

「何かよくわからない人たち……かな？」

「よくわからないってどういう」

「あ」

「あ」

「あ」

「あって何かな、あって。　　あ」

4人揃って「あ」って……　　最初がボク、次は篤、その次が鈴、最後が一夏。

「……………」

「篤……………」

一夏の陰謀……？ あとがきにお知らせその2を追記しました（後書き）

全体的に原作のセリフそのままのところが多いです。やっぱり原作と同じ展開のところを自分風に書くのはニガテです。。。

さて、今回はまた日曜日に……と、言いたいところなのですが、土曜日に全国のランキングが出る重要なテストがあるので日曜日の更新は出来なさそうです。

そのため、今回は来週の木曜日になります。

お知らせ

…… 申し訳ありません。私が今回は14日だと予告して早2週間。未だに更新できてないです。

これは言い訳にすぎないのですが、今月は塾、部活、バイトなどいろいろなことが一気に決まり、体力的に厳しくなってきました。

（今までは夜中に書いていたので。。）

そのため、大変申し訳ないのですが、更新のペースがかなり落ちます。

今の生活に慣れるまでは少しずつ書いていくつもりですので、更新を停止するわけではありません。

……更新は停止しませんよ？（しつこい

お知らせその2

…… またまた申し訳ないです。

夏休みに入って時間もある程度出来たし、久々に続きを書くことと  
思っテテキストファイルを開いてみると……



はい、アイディアが殆ど飛んでおりました ><

自分で書いた作品の続きが気になる始末。

・・・ごめんなさい、今度からはアイディアが思い浮かぶと同時にテキストファイルが何かにメモるようにしますね。

それと次回の更新なんですけど、やはり未定です。ですが、更新をやめることはないです。時間がかかっても書くので、気長に待ってくれると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9787t/>

---

IS Unendlich · Stratos ~ Er?ffnung das Schicksal der sch?nen Blumen ~

2011年8月30日08時49分発行